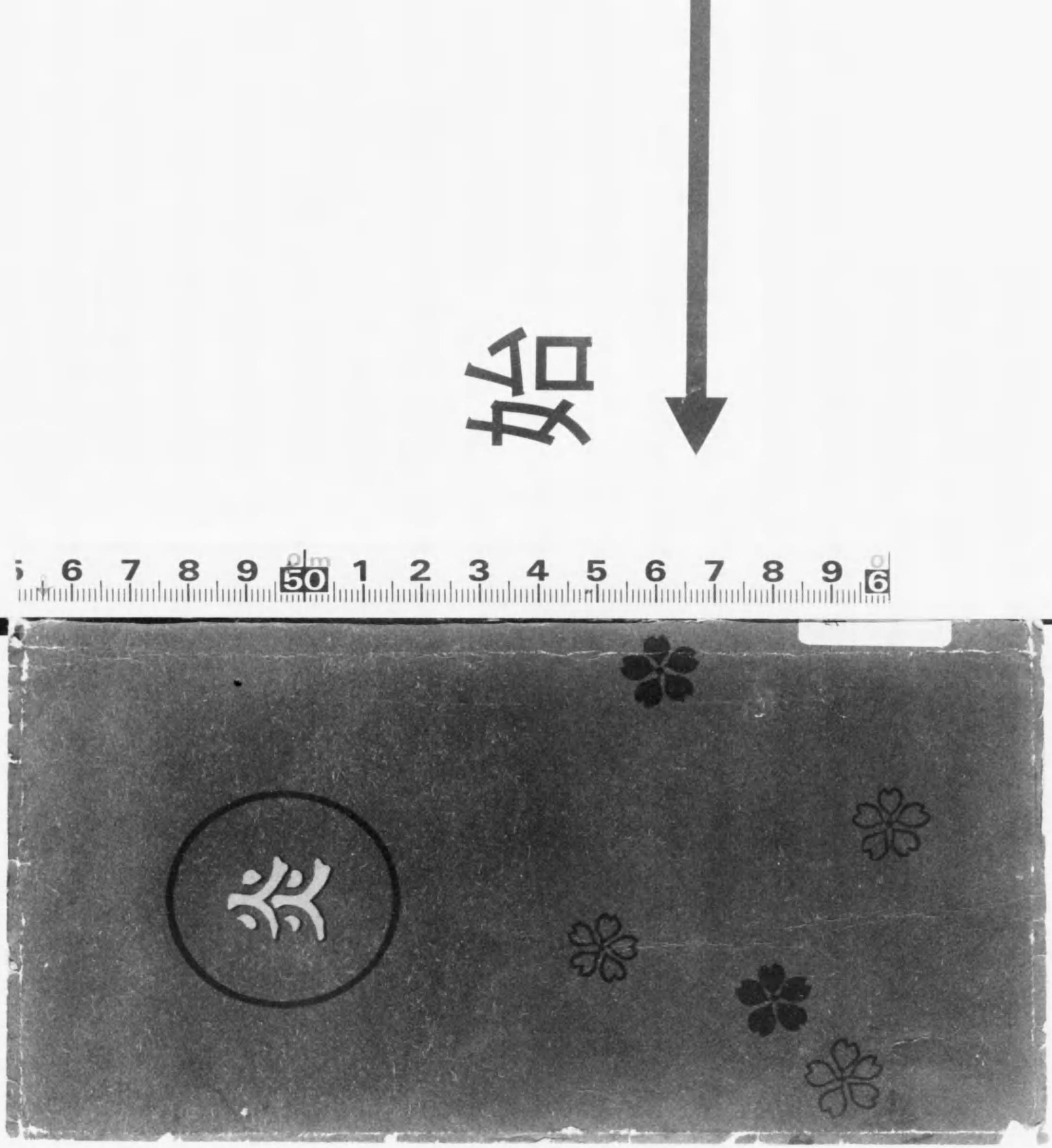
袋

60

特270
367

川面先生十周年記念出版

川面先生格言集

炎

川面凡兒先生十周年記念會刊行

昭和十四年五月
帝國圖書館

川面凡兒先生小照

川面先生小傳

川面先生、通稱は凡兒、字を恒次、諱名を吉光と稱す。別に殿山の號あり、大分縣宇佐郡兩川村字小坂の鄕士川面仁左衛門吉範の次男として文久二年四月一日同所に生る。七歲の頃より七八年土地の大儒鶯海及び恒藤兩先生に就いて徧く皇漢の學を修め、聖學の堂奧を究む。十五歲の春意を決して馬城山に入り、三年間全く世俗と絕ち、仙童蓮池貞澄につき專ら仙道を修し、諸有る辛慘を嘗め盡して性を諦め身を鍛え眞を究め、又神明に導かれて各種の神傳を得たり。十九歲の頃熊本城南約三里の隈ノ庄町に稚龍同盟谷と名づけて私塾を開き道を講ず。二十三歲上京して專ら法律經濟を研究したる後、雜誌「日本の政黨」を發行す。其後更に廣く佛敎の敎理を探り、深く各宗義の薀奧を究めんと欲し、蓮華法印と稱して盛んに森田悟由、松濤泰成、福田行誡、黑田眞洞等の大德名僧智識と交通す。三十三の年、小石川傳通院に於て佛書研究中、輪島聞聲師等を助けて淑德女學校を創立し、其の敎鞭を執る。三十五六の頃、我國の政治を實際に究めんと欲し、政黨に身を置き、自由黨報に力を盡し、次で長野に入り長野新聞の主筆として自由黨の爲に萬丈の氣焰を上げ、更に熊野に移りて實業新聞の主筆として力を揮ふ。四十歲の春再び上京して朝野新聞に入る。

明治三十九年四月一日、四十五回の誕辰の吉日に當り、下谷區三崎町の陋屋に於て稜威會を創立

し、「全神教趣大日本世界教宣明書」を發行し我が神ながらなる祖神の大道の宣明に出發せらる。翌々四十一年一月一日、下谷區初音町の寓居に於て、機關雜誌「大日本世界教みいづ」を創刊す。明治四十二年正月相州片瀬に於て、會として初めて修禊を開始せらる。大正三年奥澤福太郎氏の奔走により高木兼寛男を會長とする古典攻究會の設立あり、先生深遠なる古典神典に據りて惟神の大道を闡明し之を普く天下に公開す。翌年之を筆記し古典講義錄として會員に頒布す。先生の名聲漸く天下に嘖々たり。大正五年春、會運漸く隆盛となり、上野櫻木町に一宇を新築し之に移る。大正十一年阿波松之助氏森久保作藏氏等の懇請に依り、稜威會本部を大久保百人町に新築せる殿堂に移す。大正十五年六月、祖神垂示に據る天照太神宮を出版發行。昭和三年九月、其の續編を出版せらる。その間日本全國各地に於て禊を指導せらるる事無量、講演せらるる事無數、著書を刊行せらるゝ事多數、一に我が祖神垂示の神道宣明に奔走活動せられ、老の方に到れるを知らずしてありけり。昭和四年二月六日より風邪の御氣味にて臥床、その後病勢漸く革り、二十三日午後一時四十五分その恩愛の親族及び多數門人の、限りなき愛惜の目に視守れつゝ安然として歸幽らせる、享年六十八歳、稜威會葬により朝野名士參列の下に葬儀を執行し、多摩墓地に葬る。

（本小傳は昭和四年四月稜威會發行川面先生追慕錄に掲載せられたる中村文山氏執筆の小傳より更に要略せるものなり）

はしがき

我が川面凡兒先生は、近世に於いて、眞の日本精神闡明に獨特なる地歩を築かれた偉大なる人物である。即ち、從來日本精神の宣明を期する者は或は、兎角支那思想、印度思想、歐米思想に對する理解に乏しく、自然偏狹なる見解に陷る者が多く、或は、理論を顧ぬ者が尠くなく、かゝる弊風は古より存して修を專らにする者は理論に據る者は實修的方面に疎く、實今に到るもなほ改まらぬ憾みがあつたのである。

然るに、我が川面先生は日本民族固有の思想精神の特色を宣明せんがためにはこれを廣く他の民族の思想精神と比較する要ありとせられ、深く日本精神の要諦の闡明に努められる一方、支那思想の學修に沒頭し、その精髓を把握せられては、更に、印度思想の研究に獻身し、その眞價を究明しかねて、歐米思想の考察に努力してその根本を洞見せられたのであるからその視野は廣汎に渉り、その判斷は極めて適正であり、この點、世稀に見るところである。先生教學の特色は唯にそれのみではない。先生は理論的檢討と共に、斷へず、實修的方面にも至大の努力を傾けられ、その傾向は

皇道說と禊祓の實修との相關的唱導に最も顯著に現はれてゐるのである。

實に先生は明治三十九年稜威會を創立せられて以來、皇道宣揚のため、著述に、講演に、禊祓の指導に、東奔西走眞に寧日なく、或は、人と應對の間に、或は、舟車旅行の際に、或は、拜神中に感ぜられたところを、その折々雜誌「稜威」の誌上に發表せられたが、それこそ偉人天籟の感興と申すべきもので、同人はこれを信仰し、却つて、理論的にして難解たる名著大作よりも心に觸れ、深く情を動かされるものが尠くないとしたのである故にこれを蒐錄上梓するならば、世人を稗益し識者を警醒にするところあると共に、先生の思想精神が現代の祖國日本に如何に必要であるかを知るの端ともならうと信じてゐたところ、偶々、稜威青年會有志の間に既に蒐錄せられたものあるを聞き、今、先生十周年紀念祭の機會にこれを上梓し、本會の事業に贊助を與へられた各位に贈呈することにした次第である。

冀くばこの先生の至言を熟讀含味せられんことを

昭和十四年二月

川面凡兒先生十周年記念會委員長　馬場愿治識

凡例

一本書は稜威青年會有志が稜威會發行「大日本世界教、稜威」誌の創刊より大正十年末までに掲載せられた川面先生の格言詩歌を分擔蒐錄し相互に回覽して意深く興多きものを選定した上更に先生に取捨を乞ひ恩師胸中に燃ゆる信念の炎やがて天下の思想界精神界を溶解し盡すべしとし「炎」と命名したのである。

一表紙裝釘は先生の令甥川面義雄大人を煩はせるところ多かつた事を特記して謝意を表する。

一本書上梓各般の事務については玉置久藏これに當り校正については主として有田滿雄時に出石誠彦その事に從つた。

川面先生格言集　炎

名花名士たれ

開くも散るも春一時、富みも貧しきも世一時。
その一時が千古萬古の一時なり、開くも散るも名花たれ、富むも貧しきも名士たれ。

伊吹と強者弱者

汝は強き人たらんとする歟、されば、強き伊吹きを吹け。
汝は弱き人たらんとする歟、されば、弱き伊吹きを吹け。

人生宇宙の偉觀

人生宇宙は物質と見れば、物質と見へ、
精神と念へば、精神と念はれ、
理性と念へば、理性と感ぜられ、
陰陽五行と見れば、悉く陰陽五行となる。
磐若と見れば、磐若。佛性と念へば、佛性。
道と思へば悉く道と見へ、
法と念へば悉く法なり。
彌陀の光明とも見え、妙法蓮華とも見え。
大日如來の等流とも見え、

阿賴耶とも、極微とも、眞如とも見え、
神の榮光とも見ゆるなり。
ああら不思議や、面白や、皆さんしつかりなさいませ。大日本民族は神
と眺め、稜威と眺め、靈魂と眺めつゝかんながらに、かんながれ、かん
ながしつあるものぞ。

生活改善の熱油

汝が風月雲烟を眺むるは、俗務の疲勞を洗濯するものぞ。
汝が信神の念を發するは、生活狀態改善の熱油なるぞ。

根本信仰

信仰、思想の衝突は、人生宇宙に對する根本信仰の相違するにあり。いづれの國民にても人生宇宙の根本信仰を等閑に附する時は、其身は破れ、其家は衰へ、其國は亡ぶものと知れ。

個人の餘力と國家に貢獻

個人は單獨の個人でなし、一家は單獨の一家でなし。家族の中の一人なり、國家の中の一人なり。家族と國家との一部分を負擔しつゝある一人なり。能く一身一家を營みたる後に其餘力を生ずる人を尊しと爲す。更にその餘力を國家社會に貢獻し、國家の力の及ばざる處を補給する人を以て、最も尊しと爲す。

一身一家を營み得て滿足する人は、國家社會に對する權能と義務とを知らざる人也、誰か　國家なくして、その一身を營み得るものありや。

信仰と國家國運

人人よ、家に根本信仰なきは、其家興隆せず、百年の基礎を築くこと難しと知れ。

國に根本信仰なきは、其國興隆せず、千年の基礎を建つること難しと知れ。

人は神より出でたり、神に還らざるべからず。家庭國家の信仰に神なきは不幸也。子孫は必ず落魄する者と知れ。

人人よ、感情は影にあらず、怒は響にあらず、怒る者は人なれども、人とは怒る者なりと解すべからず。さては怒とは何者ぞ、幽靈か、古に今に之を解し得ず、教と戒とあれど、影の如く響の如く、なくてあり、ありてなきに似たり。人人早く汝が祖先たる神代思想に復活し來れ、來りてその實質的思想を世界列國に普及し、廣く世界の人人を救へかし。

宗教家教育家の誤解

人より神に合一するは倫理なり。神より人を同化するは宗教なり。人の神に合一する道を説明するは是れ倫理説也。神の人を同化する道を啓示するは是れ宗義なり。

倫理説は人を本位として神に及ばんとす。宗義は神を本位として人に及ばんとするものなり。宗教を人化すれば倫理となり。倫理を神化すれば宗教となる。歸する所は、賢聖たり、神明たるにあり。

倫理は表にして宗教は裏也。倫理のみで滿足する人類でなく、宗義のみで足れりとする人類に非ず。故に倫理と宗義とは相待て其全きを全ふするもの也。

人人よ、人間は一生にして、烟の如く消滅すると思はゞ誤解なり。
人の見ること能はざる迄にして、烟は全然消滅するものでなく、
人人の身も肉も消滅せず、只形の變化するばかりぞ。
今にしてその道の人人に尋ね問はずば、必ずや悔ゆるの日あるべし。

長所を以て戰へ！

智あらば其智を以て世と戰へ、學あらば其學を以て世と戰へ。智なく、
學なくんば、力を以て世と戰へ、いづれにても、自己の長ずる所を以て
油斷なく奮鬪せよ。
然れば永く貧せず窮せず、神は必ず汝に其報酬を與へん。

惡平等と痴人の夢

眼のみの人にても異なもの、骨のみの人にても異なもの、女のみにても
夜は明けず、男のみにても晝は暮れぬものか。人生は愚者のみでも曲な
く、智者のみでも味なきものぞ。まして智愚平等にては、人生は成立せ
ず、渾然一色一香たればなり。
惡平等の妄想妄動は、痴人の夢、狂者の嘘語たるに過ぎぬ。

月と糞

月は美くし、糞はきたなし、
それは人間の眺めかたなり。

差別と平等

複雜を究め、差別を究むるの極は單純平等となる。
單純平等の極は、複雜差別となる。
小兒は老人を慕ひ、老人は小兒を愛す。
花は果實となり、果實は花となる。

萬有と境遇

萬有の半面は、その四圍の境遇に制せらる。
孔子も釋迦も、耶蘇もマホメットも、マージも、狐も狸も、その境遇に制せらる。

世は樣々なり

世は樣々なり、愛らしき鳩も怒れば、怖ろしき豺狼も笑ふことあり。豚は終日横臥して猶不平の聲あり。
熊も鐵柵に入るれば、人間に愛嬌をふりまく。

善惡の思想

我が一念の善惡は、呼吸する毎に、氣と化し、魂と分れて家に滿ち、門外に去る。
その氣、其魂は、觸るゝ處に向て影響す、一念なりともその善惡の思想を、忽にすべからず。

怒と鏡

悲しき時には、鏡に臨め、怒る時にも、鏡に向へ。
而して汝の顏貌を視よ。
いかなる品韻、いかなる愛嬌かある。
少しく常識を有するの男女とせば、
泣かれた者でなし、怒られた者でなし、
泣きつゝ其顏を視よ、怒りつゝ其貌を視よ。
我ながら愛憎もこそも盡きはてなん。

柴の戸

胸藏萬卷、眼看古今、悠悠自適、獨座彈琴
柴の戸や胸の秘事琴によせ神も聞けとて奏でつるかな。
戀ならぬ胸の思を柴の戸の月の外にも知るはしるかは。

態度と本性

汝等色男を氣取れば柔弱となり、俠客を氣取れば强者となり、武士軍人を氣取れば、劍光砲火を意とせず　各自の態度姿勢は、直に汝等の本性を顯はすものぞ、汝は如何に氣取りて其本性を顯はさんとする歟。

當著の神法

暑い、あつい、と言つて暑氣と戰へば、何人も太陽に、打勝つこと能はず、是何事も營むことなくして、太陽と戰ひ、暑氣と爭はんとすれば也。奮然、イーエッ、エーイッ、と發聲し、其職に就き其業を營むべし、職を務め、業に專なる時は、只その業務の進行する樂みあるのみ、亦盛陽熱暑あるを知らず。

業務進歩の樂地には不可思議の清涼あり、天の眞井の神風神水、颯爽として間斷なく吹き來る。

主客顚倒の觀

高い山から＝谷底見れば、瓜や茄子の花盛り。

低い畑から＝高い山觀れば、葉山繁山夏木立。

自分の糞は、惡臭からで、人の欠伸は嫌な氣がする。

自分の眉毛は見へやらで、人の睫毛は吾眼に留る。

支那、印度、阿剌比亞、歐米諸國の根本信仰と人生の榮枯

印度思想も支那思想も、其根本信仰に靈格的主神なし、故に人生發顯の帝王を見ること夢幻の如く、共に以て其國を維持すること能はず。

猶太思想、阿剌比亞思想は、其根本信仰に靈格主神ありと雖、主神の活動的分身たる八百萬神を認むること能はず。故に亦人生發顯の帝王を輕

視し、其國を維持すること能はず。

今日歐米列國は基督思想に反抗して、科學を唱道したる結果、その興隆を來しつゝありと雖、其根本信仰は科學的哲學的に靈格的主神を認めざる者と、その靈格的獨一主神のみを信仰する者とに過ぎず、未だ共に、八百萬神を認むること能はざれば、人生經綸の基礎確定せず帝王を見ること土芥の如し、一朝の事變に會すれば、亦遂に亡國に歸する憂あり。

勿美他人の父母

人人よ汝の父母を愛して、他人の父母を美む勿れ。

無智劣等の人など、我が父母を怨みて、他人の父母を美む。他人の父母を美むも益なし、我が父母を愛するに如かず。

他所に眺むればこそ美みもせめ、一旦養子養女となりて我が父母となし見よ、さまで美むほどの價値なく、却て生みの父母こそまされとこそ知るべきものぞや。

感情の實體

感情も怒も、影でなし響でなし、皆その實質あるものぞ。

感情の實體は、魂なり、怒の實體は魂なり、魂の鼓動が感情となり、怒とはなるものぞ。

一の魂は、分裂して百千萬億の分魂となる。その百千萬億の分魂が、そ

の行くべき道を失すれば、相互に衝突し一身の平和を缺ぐに至るものぞ。」

凧男とゴム玉女

男子が良妻賢母を要求する如く、女性も亦良夫賢父を要求すべし。
女に同情なき男は、亦女に同情せられぬ男なり。
男に同情なき女は、亦男に同情せられぬ女なり。
女に同情なき男は、禽獸なり、豺狼を妻とすべし。
男に同情なき女は、夜叉なり、惡魔を夫とすべし。
愛なき男は凧の如し、いづれ山川に野たれ死にすべし。
節操なき女はゴム玉の如し、末は破裂して、泥土に往生す。

興國的民族と滅亡の禍根

人人よ。一身を知るか。一家を知るか。一國を知るか。世界を知るか。
全宇宙を知るか。
更にその一身一家一國一世界と全宇宙とは、相互に關聯統一しつゝある
ことを知るか。
人人よ。一身一家一國一世界と全宇宙との發顯したる根本本體を知るか。
人間としての不幸は、其根本本體の何者たるかを知らざるにあり。

人人よ。學ある者は、深く究めて世に示せ。學なき者は、學者に就きて之を聞け。學者として究むる時は難きも、學なく智なき者としては、之を聞くこと容易なり。

人人よ。衣食住のみを以て、人間の能事とする勿れ。富貴のみを以て、人間の優者とする勿れ。衣食も富貴も、根本本體に達する手段なりと思へ。興國的民族は、衣食と富貴のみと思はゞ誤なり。そは却て滅亡の禍根と知れ。

瑞垣に落葉拾ふて朝夕の烟も神の惠なりけり。

驕奢淫逸

一身一家のみ驕奢にして、同胞の困窮を哀愍せざる權者富者は、不幸也、其子孫は遂に淫逸して落魄すべし。

其身牢獄子孫沈淪、第二の富者權者

富者權者のみを嫉視して、現在の制度を破壞せんとするものは、不幸也其身は牢獄に投ぜらるゝのみならず、子孫は益々悲境に沈淪せん。

聞け、現在の社會制度を破壞し得るとするも、破壞したる曉には、更に第二の社會制度を生ずるると共に、第二の富者權者の顯れ來る者ぞ。然り破壞し得たる優者が、眞に第二の富者權者と變化する者ぞ。

博愛說、平等涅槃、自然無爲

平等的博愛說は、無差別にして、惡平等なり、實行し得らるべきものでなし。腦中の妄想机上の空論たり。世道人身を害するとも益なし。佛者の平等涅槃、老莊の自然無爲、畢竟人間を枯木死灰視せんとするもの、家庭あり、國家ある人類は、斷じて其妄誕不穩にして實行すべからざるを看破すべし。

問へよ、問へよ

人人よ、問ゆるはよし、問へつゝ、其問を解決せよ、さればかしこき人となる。

問へつゝ解決すること能はざる者は、愚なり痴なり、誰かは愚痴の人たらんとするや、問へよ〳〵而して更に解決する所あれ。

解決の道は我と彼との比較觀念より始まるなり。

比較觀念なき者は、我のみを一意に思ひつめ、遂に入水縊首等するに至る。

問ゆるはよし、問へて眞に我と彼との比較あれ。

世界主宰の大民族

祖神ありて祖國なき民族は、獨立する能はず、祖國ありて祖神なき民族も、その獨立は永久なる能はず。祖神あると共に、祖國ある民族にして、初めて永久の獨立を保有することを得。是れやがて、世界統一の大主宰

者たる民族なりと知るべし。

子孫長久の計

迂濶なるかな、世の人人、信神の念は、人生の禍福に影響なしと、憶斷して、其身の安養、子孫長久の計を立つる能はず。

迂濶なるかな、世の人人、正直なれば神を拜するに及はずと云ふ。而して正直の本體の神たる事を知らず。

正直の本體は神なりとせば、我は分體としての正直神たるを思へ、更に分體身の正直は本體神の正直に及ばざることを思へ。

分體身の正直は、時々曲ることあれども、本體神の正直は曲ることなし、

故に本體神を拜みつゝ、分體神の正直を圓滿にせねばならぬものぞかし。

魂の變化

魂は笑と化し、悲と化し、涎と化し、涙と化し、動作と化す。魂は喜怒哀樂、愛惡慾と化し、同情の人と化し、冷酷の人と化す。魂は智と化し情と化し、意思と化し、惡人と化し、善人と化す。

魂は戀に化し、繪畫彫刻に化し、演劇に化し、詩歌に化し、音樂に化す、魂は宇宙に化し、萬有に化し、月雪花鳥に化す。魂は斬取窃盗强盗に化し、詐欺師、山師に化し、賢人哲人大聖に化す。魂は善に化し、眞に化し、美に化し、神に化す。

表觀の月、裏觀の月

宇宙萬有は裏觀すれば靜止なり、單元なり、平等なり、表觀すれば、運動なり、複雜なり、差別なり。

東西の學者この表裏の兩觀あるを悟らず、古より今に至る迄、相互に一方のみに割據して論難攻擊す、愍むべき哉。

家の內外、屋外より眺めたる家と、屋內より檢したる家は均しく家なれども、觀を異にすべし。

言葉と腹との表裏相反する者あるを知らば、事物は何ものにも表裏ありと知れ。

表觀したる月も、裏觀せばいかに、人間より眺めたほどの者でなく、却て光澤なかるべし。

不平ある人

其君に仕へつゝ、若くば其主に從ひつゝ、其君の非を擧げ、其主の缺點を摘發しつゝ、不平ある人は不幸なり。

非あらば諫めて之を正し、缺點あらば助けて、全からしめよ。而後自己の技倆は顯はれ自己の聲名は傳はる者ぞ。

其君に非なく。其主に缺點なくば、自己の技倆顯れず、自己の聲名はい

かにして傳へ得べきぞ。

非ある君、缺點ある主こそ、我が爲には却て技倆を顯はし得る者たれ。それを何ぞや、其非を擧げ、其缺點を摘發しつゝ。常に不平を泄らすとは全く自己には技倆なきを自白する頓馬の骨頂也。

他に仕へ、他を助けて功を建つること能はざる頓馬は亦自立して、我事も成す能はざる痴漢也。

知己なき歎

天下知己なきの歎を發する者も、亦阿呆也。天下の知己なきに非ず、知己たらしむるだけの識見、節操、赤誠が我になきのみ。

丈夫何ぞ知己なきを憂へん、我に識見、節操、赤誠等あらば、天下をして、悉く知己たらしむることを得べし。

地球と國常立命

このごろ歐米の學者は。漸く地球を以て、有機體たることを知る、日本民族は太古以來、その大有機體たることを承知す。故に之を尊びて、國常立尊＝一名＝つのごりずむのみこと、と稱へ奉りぬ。

「つのごりずむ」とは、角の如く凝り結びたる靈と云ふ意味なり、靈は魂なり、魂の凝り結びて、角の如く突起したりと形容したるものなり。今日の電子原子が凝結して角形圓形方形の物體を爲すと云ふに同意也。

裏觀して「つのどりずむのみこと」と稱へ、表觀して「國常立命」とは稱ゆるなり。

眼鼻なくば生物に非ずとせば、手や足や、腹や胴や、肺腸胃等は眼鼻なし、生物にあらずと云ふか。

色彩音響香味、形式段階一定

衣食のみ與へて、兒童の口腹肌合の官能を發達せしむるは、是れその兒を片輪者たらしむるものぞ。

將來は口腹肌合と共に、眼鼻等の官能を發達せしむる事に注意せざるべからず、育兒法、教育法の漸々進歩するにつれ、その色彩音響香味等の形式段階も一定する日も來るべき歟。

邦家獨立の大基礎

祖神ありて祖國なき民族の歴史は如何。

祖國ありて祖神なき民族の歴史は如何。

更に祖神祖國不二一體の民族の歴史は如何。

是れ實に邦家獨立の大基礎たる事を忘るゝ勿れ。

苟も人類たり民族たり國家たる者は這般の歴史を忽にすな

神佛本末、言語名稱、愚の判斷

神と云ひ、佛と云ひ、天といひ、ヱホバと云ひ、イーラと云ひ、アーラと云ふは、國々の言葉なり。

宇宙の根本は、唯一絶對なり、日本は尊びて、天御中主太神と稱へ、印度は毘留遮那佛と云ふ。

印度で十方諸佛諸菩薩權化、明神善神と云ふは、猶日本で天津神、地津神、八百萬神と云ふに同じ、言語や名稱で、本末を定めんとするは、愚の極なりと知れ。

熱氣と、熱魂

「いかる」は「いける」也。魂の生き生くる也。

「おこる」は「おこる」也。起る也。魂の起る也。

「いきとふる」は生き通る也。魂の生きつゝ先方に通過する也。

人身は常に熱氣の發散しつゝあり。

他と衝突すれば、激して發散す。他と調和すれば、平かに發散す。熱氣と云ふは、客觀したる名稱也。主觀すれば、熱魂である。熱魂の發散は人に向てすべからず、事業に向て發散するか、寧ろ大空に向て發散すべきもの也。

單元と數多

單元は質なり、數多は量なり。

單元は體なり、數多は用なり。

單元は不變化、數多は變化也。

單元は靜的也、數多は動的也。

單元と數多は、表裏相待つ者。

一方を排せば、一方も倒るゝ。
表裏相待ち、質量相存して全し。
單元とは靈也、數多とは魂也。
靈は質也裏也、魂は量也表也。
質量不二なる如く、靈魂も一體なり。

戀の自由と長上の保護

戀も亦自由也。

其身は自由に發達したる者とせば、戀も亦自由也。
誰にも遠慮會釋はなきものぞ。其身は父母長上に保護せられて發達したる者とせば、是れ我身にして、我身一人の身に非ず、父母長上に關聯したる身なり。然れば戀も自由なるべからず、戀の結晶體たる良人を選ぶに就ては其關聯したる父母長上に相談せざるべからず。父母長上は、過去も現在も未來も、總じて其身の發達を祝福しつゝあるものなれば也。

世界第一の萬能機械

世界に發明したる機械は多し、千百五億雷ならず。然れ共、いづれの機械も、或る一物に應用し、若しくば、或る一品を製造したるに過ぎず。
人人よ、更にあらゆるそれ等の機械に優れたる大機械ある事を知れるや。
いかなる事物でも、如何なる機械でも、この大機械にかくれば、製造せられざるものなく、實に萬能の大機械なり。
人人よ、之を知れる歟。
其の大機械とは外ならず、人人それ自身也、人間也。

人間の大機械にかくれば、如何なる事物でも、器械でも製造せられざるものなり。

人人はその大器械を有しながら、終生何事もせず、安閑茫然として、此世を空過するとは愚の極ならずや。

來年こその豫言

歳晩の感懐はやがて一代の感懐となる。

歳晩の感懐を常にもがもに忘るゝ勿れ。

おろかなる人よ！　元旦屠蘇一杯にあたら歳晩の感懐を烟にす、來年こそはの豫言も、春の霞と薄らぎ、夏の暑さととろけ、そと吹く秋風に心付けば、冬の收穫は無一物、年々同一の歴史を繰返す勿れ。

一代終結の末期は、間もなきものぞ。

男子折角世に出で、よしや衣食住はたらふくたりとも、何等の事業も、鄕黨郡縣、はた國家世界に、貢獻すること能はずとせば、汝の腑甲斐なきを歎ずべし。

姑と愛

姑に愛せられたる女性は、第二の姑となりたる日に亦我兒の花嫁に慕はれ、老後は益安穩なりと知るべし。

朝夕にかしは手高くをろがめば
ただしかれとは我に勅りてき。

我と吾身の神體、神人合一と事業の建設

名稱に依りて實體を忽にすること勿れ。

名稱は國々の言語なり。國々の民族は、其名稱に依りて、其實體に近づかんとしつゝあるものぞ。

日本民族は、天御中主太神と八百萬神との大御名を稱へつゝ、その實體と分體とに近づきつゝ、感應合一し、眞に我と吾身に其神體を天照らし來りつゝあるものぞ。

神人合一の樂を知らざる者は、神人を感動し、天地を震動せしむるの赤誠なきものぞ。

人類としては、孰れの人人も、神人合一の我とならねば、絶世の事業を建設すること能はず、よしや建設するも後世子孫をして感奮せしむるに足らざる者ぞ。

學者の眼光

有限＝無限、定數＝不定數、單元＝複雜、

是れ皆對比の言葉、或る範圍に於て、兩立する者、一方を排せんとすれば、排する一方も亦斃る。一方を排して、一方のみ成立し得べきものでなし。

然るを古來多くはその消息を會得せず、いづれも、その一方のみに偏局して、是非の論を爲し、あたら月日を過したりき。

今日猶一方面をのみ研究し、一方のは長のみを視、一方のは短のみを眺

め、相互に是非して論爭しつゝあり。何故にかくも眼光の薄きものか。

自由結婚の末期

世には一種のハイカラと云ふ男女あり。

父母に談ぜず、自由に結婚し、戀の神聖を誇る。

をかしや、その喃々の睦言も、一年か二年經たぬ間に、笑談は變じて、本物の喧嘩となり、嫌味となり、離緣となり、離緣の後にも相互に罵り合ふよ。

離緣とならねば、舅姑とは不和となる、舅姑を泣かして平氣なり。老人をば別居せしめて自己等夫婦の獨舞臺宛然一家平和の破壞者也、惡魔也。それで出來たその兒は腕白もの、箸にも棒にもかゝらぬ人間の惡態もの、

因果は廻る小車や、腕白ものは成人して嫁を取る、その嫁よりは若隱居としていじめらる。

老いたる舅姑は、墓下にて冷笑せず、寧ろ血の涙を流しつゝ、子孫の行末を案じ居るなり。而も一人の來りてその亡靈を祭るものなし。

富と貯財の別

人人よ！　富とは金錢のみを意味せず。

單に金錢のみを貯蓄するも、大長者たるは難しと知れ。

人人よ！　富と貯蓄とは同じからず、貯蓄にも何かの原因ある如く、富を爲し富を守るにも、基礎ありと知れ、基礎とは何ぞや。一考せよ、人生の大事。

天津神國津神達まもります

わがゆく道は榮あるみち。

うつり行く世をながめてはわが道の

たらはぬことのありとこそ思へ。

天地に思ひ足らはし祈るかな

わが行く道に榮あれとは。

人物自然の音樂

萬有悉く音樂を有す。詠歌は人類性情の自然的音樂也。自己の思想を詠歌し、萬有の繁榮を詠歌し、神人の功德を讃美する天津のりとのふとのりごとは、人類として缺ぐべからざる天倫の形式にして、その實行に伴

ふ向上的發達の大神樂なるぞかし。

天人事象の關聯

泥中に棲息する動物と空中に棲息する動物とは、自から共命運と責任とを異にするが如く、東西に栖息する民族も亦その各自の命運と責任とを異にす。

四圍の氣象風土は、亦その棲息の動物を感化し刺戟し援護する所あり。人事と天事とは、自から關聯する所あり。この間の消息を自覺遂行する者は、益神護を受けて光を發し、自暴自棄する者は漸々神罰を蒙りて滅す。新春第一この間の消息を解する者は、その人その家その國、必ず祥あり大興隆を爲す。

半信半疑、說明不完全

世界人類、到處に靈魂觀を爲し、靈魂說を爲す、而も、いづれも完全ならず、半信半疑の懷疑中に迷惑す。

一たび日本神代の靈魂觀を究明せば、いかなる學不學にても之を疑ひ、之を怪むの餘地なかるべし。

八卦の人、幹支の國

八卦を信ずる支那人の有樣は如何。

八卦幹支を信用する支那政府の現狀は如何。

興國民族としては考ものに非ずや。

自然の生存と共同的生活

植物は、生慾一偏の利己主義にして、弱肉强食、自然的適者生存その儘也。

動物は利己なると共に利他、自然的適者生存に幾分づゝの共同生存を加ふる也。

人類は固より自然の適者生存のみに安んぜず、更により多くの共同的生存を加へつゝあるものとす。

科學の發達と靈魂問題の一致

昔はいづれも靈魂問題盛なりき、一度科學の開發して客觀世界に重きを

置き、萬有に靈魂なしと憶斷すると共に、主觀世界の人間にも靈魂なしと、即決せんとするも、人類をして、滿足せしむること能はず。

更に科學哲學の益々進歩發達するにつれ、客觀世界の萬有にも、靈魂あることを究明し得るに至り、翻つて主觀世界の人類の靈魂を究明することが漸々盛なるに至るべし。

而して科學哲學宗教、茲に初めて調和一致し、人類生活の狀態は、益々進歩發達の境に達する者とす。

統一の人

自己の意識五官を率て統一する人となれ。
一家の同胞一族を率て統一する人となれ。
一町一村一郡縣を率て統一する人となれ。
天下社會を率て統一するの大丈夫となれ。

斷行の人

事に臨めば、愚なりと云ふて、謙讓する勿れ。
賢なりと思ふて、傲慢たる勿れ。
一に自己を重んじ、人を敬み、天を恐れ、神を尊べ、
思ふて任じ、任じて行へ。

始を知り終を究めよ

共始を知り終を究めたいとは、萬有自然の通有性である。只劣等なる者ほど、始を知り終を究めんとする考が起らないのである。その身の始を知り終を究めたいと云ふ考の發し來る時は、その身は漸く高尚なる靈動に近づきつゝあるものと知るべきなり。

國家の範圍、個人の横行

國家としては共同生活を主とし、正義人情を經緯として、貧富貴賤を調和統一しつゝあるもの。

單位なる個人も、この範圍を脱出するものは人でなし、國家社會は漸々驅逐してその横行を許さゞるに至るものぞ。

太陽觀の異同

人間より他觀したる太陽と、太陽自身に自觀したる太陽とは、異る所ありと知れ。

自觀したる太陽でも、表觀的總觀の太陽と、表觀的分觀の太陽とは、亦自から異る所あるを知れ。

裏觀總分の太陽

且夫れ裏觀したる太陽と、裏觀中の自觀したる太陽とは、更に異る所あ

るを知れ。
ましてや、裏觀中の自觀でも、その總觀と分觀とでは、亦復大に異る所あるを知れ。

火の玉火柱

一口に太陽と云ふて、火の玉火の柱とのみ見ることの、愚かさよ。天文學も、漸く發達するにつれて、その愚を自覺するに至るべき也。

發明の地盤

哲學者も科學者も宗教者も、發明は是からなり。
哲學も宗教も科學も、今日までの研究では、發明の地盤を築き得たるに

過ぎず。而も日本民族の先人は、三、四、五、千年の大昔よりこの間の消息をほのめかしありたりと聞かば、世界人類誰かはその宏遠崇高なる遺訓に驚歎せざる者あらんや。

各專門の尊重

各自專門の研究あり、一の研究を以て、他に推論し、他も悉く一の研究通りなりと云はゞ亦專門的研究も要せざるに至るべく、さすれば、各自專門の學科も、職業もなきに歸着すべく、苟も專門の學、專門の業なかるべからざるを知る時は、自己專門の學と業とを重んずるが如く、他の專門の學と業とも尊ばざるべからざる者とす。醫學專門の見地より、宗教的神の有無を批判するは、宗教專門の見地より、人間を診察し投藥す

ると同様、いづれも共に危險千萬なり。

魂躍

夙に起き、禊して、豊さか昇る朝日を拜みまつれば、人人は如何なる感想か發すらむ。美也。壯快也。氣奮ひ魂躍るべし。

神の稜威と照鑑攝理

汝等は神の稜威に包まれつゝあるを知らば、更に其身は神の照鑑の下に生息もし、行住坐臥しつゝあるを知るべく、而して誰かは邪を犯し、惡を爲すことを得べきぞ。

已に邪を犯さず、惡を爲さずば、正を念ひ、善を爲さゞるべからず。人知れずに、暗夜窃に正を念ひ、善を爲す是れ已に神に攝理せられ、神に近づきつゝあるの兆候と知れ。ましてや、白晝公然正義を唱へ、善業を爲す、是れ已に神の分身たり得たる者ぞ。

口に正義を唱へ、身に善業を爲す。其時其際、いかに汝の心廣く體胖かなるべきぞ。天にも地にも飛び立つ愉快あるべく、其處に、光あり、神の稜威を拜すべし。

好春三月

人にも聖人あり。神にも惡魔あり。

我は是れ正直なりと、神の廣前に自白し得る時は、人をも疑はされ、均しく是れ正直者なるぞ。

人に向つて食言を尤め、違約を責むる時には、我は曾て食言したる事なき歟。違約したる事なき歟を思へ。

人に對して、その無能を戒むる時は、我に如何ほどの能力ある歟を反省すべし、人の不信用を責むる者は、その身も多くは世に不信用の人たるにあらざる歟。

生活の人はパンを思ひ、パン以外の事業なし。

主義の人は、パン以外の心配あり、事業あり、パンのために主義を棄てされ。

都は美麗なれども多忙、田舍は素朴なれども閑暇。

花天月地、好春三月、神の榮、平和の光、都鄙いづれにもあり。

これさ見さんせ櫻の花を
日本男兒の伊達姿。
枯尾花あれもお怪の手下なり。

文明の花、野蠻の骨

二大戰勝に世界を驚かしたる大日本帝國は、古羅馬を追想せざるべからず。

羅馬の興隆する日は、已に羅馬の衰亡する禍根を醸したりき。

驕奢は文明の花、素樸は野蠻の骨なれども、一國の興廢を思へば、花に醉ふて亡びんか、骨に忍んで興らんか、骨なる哉、骨なる哉、野蠻の骨。

佛耶の比較

佛教は基礎より造らんとして、未だ屋根に及ばざる者也。

耶蘇教は先づ屋根より造りて、基礎の堅からざるもの也。

（獨逸碩學、ハルトマン）

屋根とは、客體の本尊を意味す。ハ氏の評、誠に適切、佛教は根本主神としては、法身佛を除くの外、孰れも、動搖する憂あり、更に法身佛としては、基礎としての屋根とは爲り得ざるものたり。耶蘇教は屋根としても、エホバの神としての屋根は、基礎以外に超絶して曖昧糢糊たるのみならず、基礎との連絡さへつかず、甚だ危險千萬也。（ニツポンタロー）

空想の人、實行の人

空想の人は、辯論巧妙なれども、何事も爲し得ず、徒に月日を送りて老大悲傷す。

實行の人は、辯論拙劣なれども、一事を忽にせず、積る月日に業を立て、德を立て老大安樂す。

酒色に心を奪はれる人は、體も疲勞して子孫なし、子孫ありとすれば、不肖なり、いづれにしても、末路はその人相應の苦痛ありと知れ。

孤立獨立の人、胸中の別乾坤

天下に孤立し得る人にして、初めて獨立の資格あり、千古に大事業を建設し得る者は、必ずや此人矣。

孤立して悠然談笑する人は自から獨立凌霄の氣骨性格を有し、胸中窃に別乾坤を開き居ればなり。

十年二十年孤立して、苦節を守るの人は、社會永く之を傍觀せず、必ずや同情を寄せ、四方八方より來り援けて其志を大成せしむる者ぞ。

こゝひといき

此處一息と云ふ處で、奮へ、屈するな、悶ゆるな、進め、イヱーッ、ヱーイッ。

あつさも冷かに　さむさも暖かになるものぞ。

成業の曙光、　閃めき來る者ぞ。

成業福德の基

イーヱッ、ヱーイッ、人生宇宙の快事は、此の聲より發す、この聲を發する者は、幸あり健康平和福德成業の基なり、イーヱッ、ヱーイッ。

志氣の强大

志は大なるべく、氣は强きを要す、志大ならざれば、奮發せず、氣强からざれば退屈す。

然れども、其身の智識學問經驗と、四圍の境遇とを觀照すべし、分を圖らずして、志大なるも、空想に歸し、氣强きも、輕舉に失し、却て心を傷め身を損す。

小事と大事

志は大にして、先づ現在の小事より勉めつゝ、循循乎と進むべし。小事なりとて、現在を忽にせば、大事も遂に成就せず、小は大となるべき基礎たるを忘る勿れ。

汝

汝は個人としていかに其身を修めつゝある歟。

汝は家族としていかに其家庭に處しつゝある歟。

汝は國民としていかに其國家に處しつゝある歟。

汝は人類としていかに其世界に處しつゝある歟。

汝は萬有としていかに宇宙に處しつゝある歟。

汝が個人としての主義實行は如何。

汝が家庭としての主義實行は如何。

汝が國家としての主義實行は如何。
汝が世界に對する主義實行は如何。
汝が宇宙に對する主義實行は如何。

不可思議不可解の事なし

人事も究め去れば神事となり神事も究め來れば人事となる。

天地固より不可思議なく、不可解の事なし。唯だ人が衣食住にのみ制せられて、思議せず肉眼のみに忙殺せられて、色なき色を視る能はず、聲なき聲を聞く能はず。漫然以て不可解と爲すのみ。

天地萬有、何事にても思議せられぬものなく、思議して已まざれば、直に了解し得るものぞ。

神事を知らざれば人事も盡し得るものならず。
神事を究むるも、人事を顧みざる者は、亦人間に益なし。

學者の蓄音機

人生幾許ぞ、時折りには神事を究めて、靈魂の歸着する所を知れ。生前已に無神無靈魂で渡るべからぬごと、死後も亦無神無靈魂で渡り得べきものならず。

學者の說を誤信する勿れ、名利の學者、肉欲の學者は、いかでか神事を究め得べきぞ。彼等の說は多くは根抵なき皮想ぞよ。見よ、彼等の眼には涙なく、彼等の肉には血湧かず、他人の說を傳ゆる蓄音機なり。

宗教の背後、哲學の前頭

宗教者の背後には哲學科學あるを忘るべからざると共に、哲學宗教の前頭には宗教あるを知らざる可らず、相互に之を排して、其教其學を說かんとすれば、畢竟その教その學も不明に歸すべく、双方共に眼光を大にせざるべからず。

朝夕胸と語る秘事

今日は何事を念ひ、何事を言ひ、何事を行ふたるや。
明日は何事を念ひ、何事を云ひ、何事を行はんとするや。

朝の念と夕の念と相應一貫し、朝の言と夕の言と照應一貫し、朝の行と夕の行と照應一貫するや。

今日の念ひと言葉と行とを、深夜私かに、胸に尋ねて、愉快を覺ゆるか、さては、不快の感なきか。

日夜念ひ云ひ行ふた事の他の模範たり得べきもの幾許ありや。
今日克く人に秀づる事能はざるも、人に後れぬ丈の事を爲し得たりや。

我身の外に他人に幾許の利徳を與へ得たりや、當然なる報酬以外他人に幾許の助力を與へ得たりや。却て他人より助力を受けざる歟、受けたる助力は自己の爲歟、公衆の爲歟。

ねんねん歌

吾常に入浴して、姿見に對する毎に、容貌甚だ醜なるを憐むと共に、慰藉して曰く、神は醜き者に寶を藏むと。

更にその矮少なるを厭ふと共に、自贊して曰く、針を魔王も呑む能はず、微なる光は宇宙到處に達すと。

腹の虫は、それで漸く安眠す、是れ我が爲には、子供だましのねんねん歌。

願と行

願を立つれば行なかるべからず、行なくての願は達せず。自ら希望せば、その希望に應ずるの實行を要す、然らずんば、其希望は達せず。

人に願ふも亦然り、神に願ふは更に然りとす。何等か其願に應ずる實行なかるべからず。

空手空言空行で、願のみかけて、莫大な利益を蒙らんとするは、却て冥罰ありと知れ。

いかに神様が正直なればとて、かゝる手段にのるものでなし。いかに神様がなさけに富むとて、さるなまけ者を惠み給ふ餘地なし。神様としては、かゝるなまけ者すら、その日その夜生活せしめつゝあるが、此上も

なきみなさけである。

厭世觀

生れた、若い、老いた、死んだ、健康、病氣、得た、失ふた、儲けた、損した、興る、亡ぶる、勝つた、負けた、吉凶禍福、成敗利鈍、誠や、人生は諸行無常、是生滅法、是れでは、山にも入りたい、現世は厭ぢや、と謂ふは頓馬ぞよ。

知と覺との區別

人生の生滅無常は、今更始まつた事でない、生滅無常あるが人生ぢや、宇宙萬有の現象ぢや、覺りても生滅、悟らぬでも無常、その悟る、覺らぬも、亦是れ生滅ぢや、無常ぢや、生滅無常は、無始無終に免れず、それを何ぞや、無常なりと悲觀するのは覺つたのでなく、知つたのだ、常あるものと誤りて居たのを、常なきものと知つたのに過ぎない、覺つたとすれば、常なき者を、常なき者と合點したもので、何にも驚くことも、悲しむこともない、當然であるからぢや。

獨り相撲ぢや興がない

この當然の出來事を歎き悲みて、世を厭ひ、人身を變ぜんとするは、迷の骨頂である、人間の世に生れて、來ぬがよい、人間の世に生れて、人間となつたからには、さつさと人間の道行を爲すのが何より肝要ぢや、人間の道行を立派に勤むることが出來れば、それは何よりの戒行で、却

て山に隠れ、禁肉禁色するよりも困難ぢや、五戒十戒五百戒、萬善戒に勝る功徳ぢや、相手なくして、罪を犯さぬと云ふことは、阿呆頓馬でも出來る。獨り相撲ぢや興がない、木石と何ぞ選ばん、かゝる消極の人人は、無常生滅の奴隷となつたもので世を棄て身を棄て、放埒至極の人で、無我處か、頑我である、眞實に我なくば、何ぞ棄るに及ばんや。

三　徳

世間公徳を叫ぶの時、我れ曰く公徳と共に先づ私徳を修めよと、世間亦盛に私徳を叫ぶ、我亦曰く私徳と共に先づ陰徳を積み得る人にして、私徳正しく、私徳正しき人にして公徳始めて大也と。

窓を開け

窓を開け、いかなる窓にても、それ相應に空氣は通ひ來るものぞ、道に高下、業に大小ありとも、その道、その業の相應に相手はあるものぞ、來るものぞ。

窓を開け、道を拓け、業を營め、職を執れ、共れよ、各自其好む所に向つて、遠慮するに及ばず。

宇宙は廣し、人生は狹からず。

一事專門

一事に專門たれ、いかなる愚鈍者にても、一專門一意に一事を專修すれ

ば、其事必ず成功す。

世人は餘りに、多智多能なるが故に、少しく不利の境に立てば、他の事務に轉じ、而もその多きを貪りつゝ、いづれも皆終を全ふせず、失敗者たるに至る。

百藝の人は一藝に通ぜざるも一藝の人は、克く百藝に通ずるものぞ。

心と神

汝等は眼に視へざるが故に、神なしと云ふ。然らば、眼に視えざるが故に、心もなしと云ひ得る歟。眼に視へざるも、心ありと思はゞ、眼に視えずとも神ありと知れ。心を信ずる者にして初めて、自己を愛し、他人を愛す。

私有村有の難易、子孫安全の良策

個人として其財産を私有するは、二、三代に過ぎず。

却て子孫を遊惰ならしむる憂あり。

その人、生存中人に指彈せられざれば、子孫必ず冷笑せらるゝの悲境に墮落す。

村人と共に、其財産を村有するは、永久に傳ゆることを得べく、其人生存中より村中に其義其德を歌はるゝのみならず、子孫は亦その餘澤に潤ふのみならず、却て先人を辱しめざる奮勵勤勞を爲すべし。

是れ唯だ目前の利害に迷ふと迷はざるとにあり。

迷ふ者は却て、天の咎めあり、火事、水難、病氣、老衰、子孫の放蕩逸樂、而して悔ゆるも及ばず、早く覺るべきは一反別の義旗、千古の餘德を村に飜へし、町に建つべき也。

生れ出でし身は何事か功建て
忘形身を世にのこしゆけ。

生ある死人

靈魂を知らざるは、自己を知らざるもの、生ある死人也。統一を失ひたる發狂者也、自己を知らざる死人、統一なき發狂者にして、學者也、英雄也と云ふ　をかしさよ。ましてや、平凡なる人々が、生ある死人發狂者たること當然也、哀れむべきかな。

彼岸の彼岸

眞如法性平等ならば、そこにそも出入なし、煩腦菩提も、如來衆生も、出人生死すべき門なく道なし。眞如緣起も、法性緣起も、賴耶緣起も、その說明甚だ窮窟、三世の諸佛、十方菩薩も、こゝなの覺は、甚だ拙い、薄い。　この處一番御修行を要す。是れでは猶彼岸の彼岸の大彼岸あり。

李阿彌の續經

初めて職を得たる時は、何人でも嬉しさを感ずると共に、にくや漸々そ

の職に慣るれば、横著となり、怠慢となり、過失を生ずるは、まだしも、不平を起し、謀反を企て、罪悪を犯し、その行爲に顯幽の別こそあれ、いづれにしても、その主の信用を失ひ、その職を奪はれ、元の杢阿彌、寒可裸坊主となり、あはれ、窃に讀經して曰く「しまつた」。

神より見たる言語
人より見たる神

言語名稱の異なるが故に、根本神はその祭を拒まざるべく、神より見れば、その言語名稱も、神より各自民族に與へつゝ、その言語名稱を以て讃美せしめ給ふ也。

人より云へば、言語名稱こそ、風土氣候につれて異なれども、尋ぬる所、歸する所は、人生宇宙の根本神なり。言語名稱異なるが故に、邪神惡魔とは言ふべからざる也。

一生懸命

何事でも輕々しく志すな、一旦志さば死ぬるまで其事に專心一意なれ。迷ふな、疑ふな、怠るな、轉ずるな。如何なる艱難苦痛でも猛然と之を排し、之を忍び、死なば、それ迄なり、死ねるまで、其事に當る、之を一生懸命と云ふ。かくては、其事敗るゝも却て我は成功なり。人間に敗るるも、天に成功す。何と痛快ならずや。

而してその千古の下は人天共に大成功者となるに至るなり。

仕事と神

仕事をせざる時は、不快云ふべからず。是れ其間は神に遠ざかりたる時と思へ。仕事を爲したる時は、愉快云はんかたなし。是れ此時は、神に近づきつゝありしものと知れ。

衆に秀でよ

汝は衆に秀でんとするか、然らば衆に秀づるの言行なかるべからず。人に異なるの言行ある者は、人に異るのほまれありと知れ。

盜賊と神

盜賊と爲りて盜賊を知り、愚者となりて愚者を知り、賢者となりて賢者を知り、聖人となりて聖人を知り、神となりて神を知る。

仕事の端緒

仕事の端緒を失ふと、怠りがちとなる。仕事の端緒あれば、勉强がちとなる。故に人々は仕事の端緒を失ふべからず。

從來の仕事を改めんとする時は、新なる端緒の開くるまで舊き仕事を擲つべからず。

いづれにても、仕事の端緒を失ふたる時は、苦痛沈落の基と知れ。

月花の色香を棄てゝ世の中に、
いかなる道か說かんとすらむ（出山の釋迦）

力落すな

遅れたりとも、力落すな。歩歩怠らねば、忽ちにして前の鴉を追ひ越すべし。

進みたりとて油斷すな。直に後の鴉に追ひ越さるゝ者ぞ。

先んずるも油斷なく徐々として進め、體廣く心肝か也。

遅くるれば忙はし進め〳〵先んぜよ、遅くるるな。

善人と惡人

生れながらにして善人たり得る者なし、善を爲して始めて善人たり得る者なり。

始めよりして、惡人たる者なし、惡を爲して而して後に惡人とはなりたる者とす。

善人たる乎。惡人たる乎。そは皆、汝等が胸にあり。

自信自行

自から覺り、自から信じ、自から任じ、自から行へ。

然れば人生亦成らざる事なし。世間碌々その克く何事を爲し得ざるものは、自から覺り自から信じ自から任じ自から行ふことなきに因るぞかし。

健全なる自己獨立

自己一人の獨立を誇る者は、試に裸體隻手で虎や熊やと格闘し見よ、い

かにその時甲斐なきかを自覺するに至るべし。

自己の獨立とは、家庭の獨立、國家の獨立、世界の獨立、宇宙の獨立を待て初めて健全なる獨立に達するものぞ。已に自己を認むるからには、更に自己に幾百倍する大自己の實在するを認むる事能はざる乎。

人間の花

人生とは貧富貴賤と吉凶禍福との間に處して、平和なる生活を求むるにあり。

貧富貴賤と吉凶禍福とのあるが人生也、故に人生は貧富貴賤、吉凶禍福は免れ得べきものならず。

貧富貴賤と平和とは、別問題也、富貴なればとて、必らずしも平和なるに非ず。貴族の家庭にも、不安あり、悲哀あり、涙あり、貧賤なればとて平和なきに非ず。

雨滴る九尺二間にも、一杯の濁酒に舌を鼓ち、一椀の粥に腹を鳴らし、一家團欒、笑あり、喜びあり、榮あり、義人烈婦は、凶と禍との間に人間の花を咲かしむ。

貧富貴賤、吉凶禍福の間に處して、平和ある者は、人間の花也。人生の目的、始めて達したる者とす。

反抗と忘恩

老人には、片言隻語たりとも、反抗すべからず。只命これに從ふべし。吾等幼少の時は、常に我儘勝手を爲して、父母を苦しめたる者ぞ、而も父母は克く之を忍び、之を愛し、吾等を育成したる者ぞ。

壯者となりて、父母に反抗するは、實に忘恩の甚だしき者ぞ。

その相互に反抗するは、何等關係なき他人と他人との事なり、むかしを思へば、恩あり、愛あり、義あり、情あり、德ある父母に對して、何條對等的に反抗し得らるべきぞ。

健鬪と安身立命

如何なる困難悲境に立つとも、我は如何に健鬪すべき歟、如何に健鬪しつゝあるかを思ひつゝ健鬪せよ。前進せよ。

是れ吾が命也、我は今困難悲境に立つべき神の命に接して、亦この困難悲境に健鬪前進すべき神の命を蒙りつゝある者ぞと、安身立命して屈せざれ、恐れざれ、かくては、假令失敗することあるも、神として、勇士として、汝の天職責任を遺憾なく、盡しつゝあるものぞ。それよ、困難悲境にありても、泰然として、健鬪しつゝあるを思へば、益々進みて前進すべきのみ、さりとは精神一到、天地を貫く、失敗も變じて、成功と

なる。
禍も轉じて福となる。
是實に神の子として命に立つ道也。勇士としての活躍なり。

百萬の財よりも信仰

人人危地に臨めば、危地より外に、雜念なし、故に共危きを救はんとして、人に賴むも能はず、身に顧るも能はず。於是乎、覺えず一神を思ひ神に訴ふるに至る。

人人その平生に於て、神を思はざるは、世間衣食住の雜念にのみ、かりまくられて、その身の危地あるを知らざるに由るぞかし。

而も暗夜窃に世間の雜念を排して、我身の生れ來る所を思ひ、我身の死すべき所を思へば、生の來る所を知らず死の歸すべき所を知らず、茫然自失、いかに危地に立ちつゝあるかを思ふと共に、死後安養の道をも尋ねたくなり。神をば叫ぶに至るべきぞ。

よしや今我は富貴の身なりとも、子孫の行末を思はゞ、子孫の行末にも優りたる實なるぞ。

信仰ある子孫は、先人の遺業遺澤を忘れず、信仰の念と共に、共死を守り、共家を興すべし。

物理以上の本體

單に物質と云ふも。宇宙萬有の根本本體として、安身せらるべき者でなし。單に理性と云ふも、宇宙萬有の根本本體として、安身せらるべき者ならず。此の如き漠然たる抽象的名稱を以て、根本本體なりとせば人類萬有は均しくこれ物質也、理性也、心性也。自己眞に是れ根本本體なりとせば、亦何をか尋ね、亦何をか求むるの必要あらん。

其身其儘に安身立命して可なるべき也、而も人人の多くは、寧ろ人類の總ては、その根本本體に安んぜずして更に何ものをか尋ねつゝ求めつゝあるにあらずや。

是れ以て、物質、理性、心性、以上に、何ものか實在ましましつゝあることを悟入するに足らずや。

怨みざれ

怨みされ、怒らされ、悲しむな、傷むな、一度怨めば怨みの息氣つゝき、一度怒れば、怒りの息氣つゝき、悲しめば悲しみの息氣つゝき、傷めば傷みの息氣つゝき、常に怨みと悲しみと傷みとの中に世を送るに至るべきぞ。

人間と論議相互の關係

いかに解釋するも、人間は人間也、唯物論でも、唯心論でも、それは何でもない、然れども、その結論の如何によりて、人生の目的や、人間の方針が定ると共に、個人としての價値、家庭としての價値、國家世界と

しての價値に、大影響を及ぼす者也。それで、古今東西とも、生を改め、代を更ふるとも、生生世世、人間としては、論結せらるゝ所までは論結せんとする也。

境遇上、慾望遂行上の信仰者

平生信仰の素養なかりしものは、一朝何等かの動機によりて、信仰の門に入らん乎。その信仰はいかなる信仰にても、信仰なき身には、今更の如く感ぜられてありがたし、眞にそれを信仰して無上のものとなすに至る。平生信仰の素養あるものは、みだりに動くものならず。必ず比較研究して、徐に取捨すべし。今日邪教に歸しつゝある人々は、その初に於て、信仰上の素養なきもの多からむ。或は一種境遇上の爲に歸したる人々も尠からざるべし。或は自己の慾望遂行上の爲に歸したる人々も多かるべし。寧ろ境遇上の信仰者、慾望遂行上の信仰者のみ多かるべき歟。その慾望その境遇を除けば、信仰も烟の如く消滅するに至るべし。

教學深淺、救の高下

いづれの宗教學說も、悉く是れ宇宙萬有根本本體の解釋なりとせば、孰れの宗義學說も正道也、邪道に非ず。孰れの宗義學說を信仰するも、共人は救はれたり。

その宗義學說の範圍に於て、救はれたる也。

唯その宗義學說に深淺厚薄あるが如く、その救ひにも高低尊卑あるものと知るべし、均しく信仰せば、より以上の宗義學說を信仰すべき也。

悔ひ改むるの人

人間悔ゆる者幾人ありや、悔ひて後改むる者幾人ありや、悔ひ改め得る者は幸なり。其人未だ己を棄てず、友にすてられず、人にすてられず、世にすてられざる證據也。悔ひ改むることなき者は不幸也、是れ其人自から己をすてたる也、友にすてられたる時也、世にすてられし時也。

護國神

生きては忠臣孝子となり、死しては護國の鬼神となる。是れ日本人の精神也、理想也、觀念也、この精神、觀念ありて、大日本國家ある所以也

成敗共に光る

貧賤も神と語れ、富貴も神と語れ、失敗も神と語れ、成功も神と語れ、病も神と語れ、健康も神と語れ、悲みも神と語れ、樂しみも神と語れ。行くにも、座するにも、神と語り、須臾も神と離るゝ勿れ、而して、其人の人格、初めて高く、成るも光あり、破るゝも光あり、成敗に依りて其光を滅せざる也。

千古の知言

イブセン曰く「天下最も强き者は、孤立の人也」

カーライル曰く「天下最も恐るべき者は、痩顔枯骨の士也」
我常にこの種の語を愛し、千古英雄の知言と爲す。此種の語を解し得るものにして、此種の人たるを知ると共に、其人初めて天下世界の事を談ずるに足る。

宗教の壓迫、天皇の尊嚴

歐米の帝王は、今猶ほ宗教上の壓迫を受く、その即位の如きも、聖堂に行幸し、戴冠式を擧げ、大僧正に就きて、寶冠を戴かざるべからず、之を大日本帝國天皇が、皇祖皇宗、天地神明照鑑中に自から儼然と即位ましまし、百官有司、神官僧侶が、その膝下に拜賀するの尊嚴なるに孰與ぞや。

帝王としては、獨り政治上、法律上、に絶對の主權尊嚴あるのみならず道德上、宗教上に於ても、亦復絶對の主權尊嚴なかるべからず。然らずんば、政權教權と分離して國家禍亂の基となる。

教と救、知境程度の發現

其教に深淺大小ある如く、其教にも、尊卑廣狹あり。然れども、その深淺大小、尊卑廣狹とも、均しく之れ大本體の發顯也。人類の智見境遇に應じ、その智見境遇の程度に應じ、程度相應に教導感化、救濟せんが爲めの發顯也。されば、高き教に接し、廣き救ひに會ふ人は、他の淺き教狹き救ひを惡むとも、邪法なりとて、罵る勿れ、之を罵る者は、其の教や、未だ以て深からず、其救や、未だ以て廣からざるを知るべき也。

晩來一陣の風

晩來一陣の風と雖、太神の稜威なりと思へば、その涼味は一段の愉快あると共に、いかに尊き感想の發すべくや。獨り風のみならず、ありとあらゆる事々物々に就てこの感想あれ、其人必ず冥々の間に神明の照鑑擁護あり、其徳次第に顯はれ、小は一家一鄕、中は一郡一縣、大は國家世界の望たるにも至るべし。

根本神に歸入

佛教各宗その唱ふる所は、異なれども、悉く、佛教に入り、佛に歸す、基督教各派、その唱ふる所は異なれども、均しく、基督を呼び、ヱホバに歸す。然らば、世界列國その唱ふる所こそ異なれ、人生宇宙の根本を尋ね、均しくその根本神に歸するもの也。名稱解釋に依りて、その根本神を個々別々に見るのみ。

凡者の孤立、英雄の枯骨

凡者は孤立すれば、益々依賴心を長ずると共に、人の其依賴に應ずる者なき時は、怨恨痛罵至らざる所なし。

その遂に痩顔枯骨に化すれば、煩悶狼狽、縊首自刄、入水毒殺、轢死するに至る。

獨り英雄の士は然らず、孤立すれば、するほど、悠悠自得、益々以て自己の大を知り、靜に現世以外の知己と談じ、世界未來の經綸を爲す、そ

の遂に痩顔枯骨に化するに至れば、益々英氣の百倍して當るべからず。やがては破裂して乾坤を推倒し、鬼膽を驚かし、人肉を飛ばし、神明をして讃美歎賞せしむ。

事業家と不慮の難

人間は常に正直に謹慎して居るも、一種の識見を立て、一種の事業を成さんとすれば、亦之れを嫉み、之を惡むの徒出で、根も葉もなき事を云ひ傳へて、之を傷けんとし、而も傷くること能はざる時は、更に何等かの口實を求めて、直接に罵り來らんとする兇漢もなしとせず。其の人にとりては、不慮の災難たり、世に識見事業を立つるの難きや、此の一端に徴しても知るべく、而も是等は細事也、其識見の益々世に顯

はれ、其の事業の彌々進行するに連れては、更に敵手、より多く顯れ、百難併び到るものぞ。

國家系統

宗教哲學科學に於ける系統を貴ぶものとせば、人間には最も系統を尊重せざるべからず、國として千古萬古を貫く系統を有する者は、獨り日本帝國に非ずや。而も是れ皇祖祖先奉齋の典儀、最も與りて力あるなり。

人の知らざる行爲

人の知らざる事を爲せば、人の知らざる報酬あり。

善惡大小を論ぜず、人の知らざる間に、成したる大善小善、大惡小惡の

行爲には、亦人の知らざる間に、其の行爲に相應したる冥々的賞罰あり。
矧んや、人の知りたる大小善惡の行爲に於てをや。

處世大經

生は喜びて、狂せされ、
老は樂んで、淫せされ、
病は養ふて、亂せされ、
死は悲みて、傷まされ。

盡人事待天

人事を盡して天を待て、喜びて狂せず、樂んで淫せず、養ふて亂れず、

悲しみて傷まざるは、是れ人事を盡す也。人事を盡して後は、神に任かせ、神の命のまに〳〵なりと、安んじて狼狽せず。之を天を待ち、天を樂しむとは云ふ也。

人の監視、神の監視

人の知る處に於て、人の知る事を爲すの困難なるよりも、人の知らざる處に於て人の知らざる事を爲すの艱難は百千萬倍の艱難ありと知るべし。人の監視は、いかに嚴重なりとも、猶且限あり、遺漏なしとせず、而も神の照鑑にありては、その嚴肅なること、寸分寸時も油斷なければ也。

破壊は小兒の如く幼稚なる者が喜ぶ所にして、構成は大成したる大人と雖、難しとする所たり。其大小を論ぜず。如何なる事物でも、破壊するは易し、構成するは難し。

人間の天職は構成に在りて、破壊に非ず、人間も破壊思想に走る時は、其身も亦破壊するに至る者と知れ。

劣等人物

劣等人物程男女の關係を口にし、淫猥極まるを恥とせず、其間亦紀律なく禮義なく、遂に亂を以て終るに至る。高等なる人間程、男女の關係を口にすることを恥づ、常に紀律あり、禮義ありて、家庭を營み、國家を經綸するを樂しみと爲す。淫本横行は、實に家庭紊亂國家禍亂、の段階

たり戒むべきかな。

魔を祝福せよ

善事は必ず惡魔之を咀ふ、而も克く善事を耐久すれば、惡魔自から斃る。善事にして初めて、惡魔の伴ひ來るを知れ。知りてその惡魔を恐れざれ寧ろ惡魔の前途を祝福し。之を耐久しつゝ、その自からに斃れ去るを待て、寧ろその斃るゝを怖れて、我に化し來るを待て。

曉や雪ふみわけてあら海に、
みそぎする身の勇ましきかな

禊ぎする身は荒岩か幾そたび
くだけて返る沖津白波

天と御幣と大小の別

天に父の神ましますを知らば、地にも父の神ましますを知れ。人身に心あり直靈ありと知らば、萬有皆心あり直靈ありと知れや。天と云ふも大なる偶像で、御幣と云ふも、彫刻と云ふも同一也。大小の差あるに過ぎず。天の中に神ありと信ぜば、何ぞ御幣の中に、彫刻の中に神靈ありと信仰し得ざるぞや。肉眼にこそ見へね、參る所に神靈天降ると知れ、其神靈をあり〳〵と拜みまつらんと思はゞ禊を爲せ、祓を爲し、汝の直靈を開き來れ。

落魄の極底

落魄の極底に、光あり、靈光あり。その光を認め、その靈光を認めたるものにして、初めて克く落魄の境を脱し得るものとす。

眞の幸福

幸福のみ、安樂のみ希ふ人は愚なり。不幸不安の境に陷りても、その不幸を樂しみ、その不安を喜ぶ人にして、初めて克く眞の幸福、眞の安樂に達し得べき也。

他人の花、自分の春

進んで他人の花をめで、果を美むよりも、退いて自から耕し自から培養し、花咲く春を待ち、實のる秋を樂しむべし。

根本的主義信仰

一言一行、主義信仰を要す。主義信仰なくんば、一言を發し、一行も爲す能はず。一身に於ける主義信仰と、一家に於ける主義信仰と、一國に於ける主義信仰と、世界に於ける主義信仰と、大宇宙に於ける主義信仰との一貫したる根本的主義信仰なかるべからず。この根本信仰ありて、身に處し、家に處し、國に處し、世界に處する時は、何等の疑惑と危恐とのなきと共に、困難を化して、平易となし、禍を化して、福となし得るに至る也。

寛容せよ

大宇宙の根本大本體化して、世界列國の宗教哲學科學を通觀せよ。一教も棄つべきものなきと共に、その地域、その時代に相應して發顯したるものなれば、其缺陷は亦地域時代につれられたる缺陷なれば、之を寛容する大雅量の開くと共に、增補大成の大慈愛發す可き也。

救濟

教としては、獨りその民族人類を救はざるべからざるのみならず、亦その民族發達の教學をも、併せて救はざるべからず。唯だ是れ自家奉戴の教條のみを讃美して、各國民族發達の教學を絶對的に否定し排斥するが

如きは、是れその奉戴の教條の、狭隘固陋にして、未だその全き教條に非ざる事を反省すべき也。

右魂左魂の人

根本信仰は人生の經過に影響し、生活狀態に影響し、個人家庭國家世界の經綸變理に影響し、その總ての禍福吉凶治亂興廢に影響す。須臾も等閑に附すべからず。而も是れ人人の愚かなる、眼前の衣食住にのみ右魂左魂して、その密接なる大關係あるを知らず、愍む可きかな、右魂左魂の人や。

まゝにならぬ……なるぞ

人生は思ひのまゝにならぬと歎息せされ、まゝにならぬ中にも、幾分づつかは、まゝになりつゝあるものぞ、そのまゝになりつゝある幾分づゝが、つもり〳〵て後には、初めて人生のまゝになることを知るに至るぞよ。初めよりして、何事も何ものも、思ふやうにのみなりては、我身は處置すること能はざるに至るべきぞ。神明は之を知り給ふ。故に汝の分相應に、その思の幾分づゝを、まゝならしめ給ひつゝあるものと悟りて、日夕感謝の念を捧げまづれ。

たえがたき夏をも知らで過ぎにけり
天の眞井に禊する身は。
大空をくまなく照す秋の夜の
月にうちのり天翔けらむか。

悲中の樂、樂中の悲

人生は餘りに悲觀せざれ、また、餘りに樂觀せざれ。悲中に樂しみを知り、樂中に悲しみあるを知れ。悲しみに處して動ぜず、樂しみに處して淫せざる人にして、初めて克く人生を踏破することを得べし。

人を咀ひ人の血を吸ふ夏の蚊も
惜しむなりけり己が生命を

神の勘當

自己の心に疾しき間は、神の呵責を蒙りつゝある者と戒めて、更に身の廓清を期し、新に愉快なる心となり身となり、神の勘當を免るべきなり。

ありし世の人し忍べばいたづらに
安き我が身の恥かしきかな。

年毎にしほの八百路に禊して
御代安かれと祈りつる哉。

國の爲盡す誠のなき人は
ありてかひなき身にこそありけめ。

骸骨

伊吹とは勇むなり、勇めば稜威煥發し、威嚴となり、十表向ふ所、敵な

し。究竟する所は、唯だ我が思ふまゝなりと知れ、勇氣なき者よ、汝の名は骸骨なり。

天が下安かれとこそ祈るなれ
せめて世にある我が思ひ出に。

天下無敵

人を惡めば人去り、物を惡めば物去り、道を厭へば道亦去る。人を愛し物を愛し、人と物との道を愛せよ。その人天下に敵なし。人を愛すれば人集り、物を愛すれば物集る、道を樂しめば道集る。天下敵なきの道他なし、天下を化して、一身同體たるにあり。

信仰の聯關一致

個人としての信仰あるも、家庭としての信仰なかるべからず。家庭としての信仰あるも、國家としての信仰なかるべからず。國家としての信仰あるも、世界としての信仰なかるべからず。世界としての信仰あるも、宇宙としての信仰なかるべからず。

同身一體

夫婦は相互に表裏して、同身一體なるが故に、內外相應じ緩急相扶け、同權相爭ふの暇なし、猶支體相應じて、同身たるの實を擧ぐるが如く、支體相爭はゞ、一身直に分裂瓦解する者と知れ。

敬愛の結晶

夫婦は相愛相敬の結晶體なり、相互に相待つて尊し、相互に奴隷に非ず彼此尊卑を問ふの必要なし。眼鼻等の相待つて、各自其分を發揮し、同身一體たるの實を擧ぐるが如し、婦の爲めには夫尊く、夫の爲には婦も尊し、寧ろ夫婦相待つて夫婦の尊きあり、一方のみ獨り尊きに非ず。

同尊一體

夫なくば婦たる能はず、婦なくんば夫たる能はず、敬愛の結晶なる夫婦間、何ぞその尊卑を爭ふの要あらんや、一身たるが故に、夫の尊きは婦の尊き所以にして、婦の尊きは夫の尊き所以ぞかし。

嫉視と反省

自己の無智遊惰劣敗を顧みて、他の有智勤勉成功に向ひ、自己の困難に悶へ、他の榮華を嫉視せんよりも、自己の困難を奮鬪脱却し、他をして反省せしむる所あらしめよ。

月に乘て天津御空をかけりゆく
心もぞする秋の夕べは。

花に月に先づ思ふかな我友は
いづこの里に眺めつるかと。

夜な〳〵の月の光に身をよせて
世の憂き人を尋ねてしがな。

夢

志す所の事業は、夢に入るまで熱心ならでは、成業の見込なし。その志す所の事業夢にまで入り來る時は、やがて實顯成功するの時と知れ。

有道の士

有道の士は、古今と戰ひ、古今を敎ふ。

共に憐むべし

法律家は道德家を笑ひ、道德家は法律家を憐む。笑ふ者、憐む者、共に笑ふ可く憐むべし。

なまけもの

手足の働かぬ人ほど言葉多し、なまけものは、手足を動かさず、口のみにて辯疏す。

唯我獨尊、神の獨兒

釋迦基督以前に遡りて吟味せよ、それ以前に於て、已に幾民族、幾宗敎のありしを知らば、彼等のみ獨り獨尊たり神の獨兒たるべきものにあらざるを知れ。

神恩、聖恩

神恩を知れ、聖恩を知れ。日神なくんば、世は闇黑なり。天皇なくんば國家紛亂す。日神あり、萬物共榮光に發育し、天皇あり、民人その大政

に沐浴す。主權者尊重の道を知らざる民人は不幸なり。尊重せらるゝ丈の威嚴なき主權者も亦不幸也。日本民族は世界に向つて敎ふる所なかるべからず。

馬鹿々々し、つまらない

名譽とか、位置とか、馬鹿々々しいや。權利とか、義務とか、忠とか、孝とか、馬鹿々々しいや。世の爲とか、國の爲とか、馬鹿々々しいや。第一人生が馬鹿々々しいや。見る事。聞く事、爲す事、云ふ事、思ふ事、すべて、つまらないや。曰くその馬鹿々々しいと云ふのも。亦馬鹿々々し、つまらないと云ふのも、亦つまらないぢやないか。畢竟するに、人間は何事か思ひ、何事か爲さねばならぬ也、均しく思はねばならず、爲さねばならぬものとせば、すべての事は、馬鹿々々しからず　つまらないものにもあらず。悉く是れ正也、善也、剛也、賢也、利あり益あり功あるものとなる也。

世人の慈心

病餘の人あり、食を得ずして、餓死すれば、世は之を憐みて同情を表す。而も生存して餘命を保ち、其門に立ち、食を乞へば、人々叱して之を驅逐し去る。死すれば憐み、生くれば拂ふ、世人の愛とは　死に發して生にはなきもの歟。世人の慈心、亦疑問となる。

一人神に歸し、安心立命する時は、その安心立命の伊吹と息氣とは、四圍を化し、家庭を化し、國家を化し、世界を化し、一族を化し、子孫を化し、朋友知人を化し、公衆人類を化するに至る。一人の安心立命は、千萬人に及び、天下世界に及ぶものぞ、尊重せよ〳〵。

怒氣怨氣の感應

面と對しては勿論、千里萬里相隔るとも、他人に向つて、怒氣怨氣を吐きかけざれ。他は自然と感じて、その怒氣怨氣を防ぐの怒氣怨氣を吹きて彈發す。その彈發する所の怒氣怨氣は、亦自然と我に感通し來りて、吾が、支體を苦しむるに至る。「人を咀はゞ穴二つ」畢竟する所は、共倒れとなるなり。

玉成靈火

貧何物ぞ、苦何物ぞ、貧苦の間こそ、氣骨も顯はれ、貞節も顯はれ、世間を感動し、鬼神を慟哭せしむる秋霜烈日の大活劇あるに至れ、貧や苦や、實に人間を玉成する活火也、靈火也。

花ならぬ花をし尋ね月ならぬ
月をしながめ泣くひともあり。
垂乳根の老の數のみ思はれて
ことしは春も花を忘れし。

理想的學者

世には理想的學者と稱する者あり、曰く神は人の造りたる迷信と云ふ。

然らば、自然とか、理性とかは、人の造りたる者にあらずや、自然も、理性も、人の抽象的に空想したる產物に過ぎず。本來自然とか理性とかの實質實體あるに非ず。均しく是れ人の造りたる者とせば、亦是れ迷信也。自己の信ずる者は、獨り實在にして、他の信ずる所の者は、迷信也と云ふは、矛盾也。抑も、神は人の造りたるものならば、その人を造りたる者は何ぞや。彼等は愚也、未だ五官以外の消息を知らず。何ぞ神あるを解するを得んや。

肉と魂

魂より神を知る。

汝の肉に魂ありと知らば、萬有個々の體にも、魂ありと知れ、而して宇宙の大にも神ましますと知れ。肉に魂あるのみならず、その肉も亦そのまゝの魂なるぞ。魂とは肉の稀薄微細なるもの、肉とは魂の堅厚粗大なるものぞ。肉に千萬の細胞組織あるが如く、魂にも千萬の組織ありと知れ。人身そのまゝ魂にして、その魂には千萬魂あると共に、魂の中の主魂あり、宇宙そのまゝ神なると共に、その神の中に、大主腦的大主神ありと知れ。

眞賢木にかゝる鏡を見て思へ
己が心にくもりなきかと。
くもりなき御代の光を日の神は
なほ清かれと照らしますらん。

生死の趣味、長生不死の價

櫻の花は散るなり、人はやがて死するなり、是れが人間界也。時には花も散らず、人も老いずしてありたき心地もせむ、然れども、人間百億萬年も生存しては、此世もいやになるべくや。散ればこそ、花は惜しまれ人も死すると云ふ事のあるから、その日、その月、その年々の事業經營が忙がるゝものぞ。長生不老ならば、餘りにのん氣にして、事業經營の希望もあらず無爲安閑にして、生存の價値もなきに至るべし。開落ありて、花に趣味ある如く、生死ありて、人に趣味の存するものぞ。されば とて、印度民族の如く、その開落あるを恐れ、その生死あるを厭ひて、出家するが如き消極的行爲ある可からず。開落は花の常、生死は人の常

として、怖れず、厭はず、家の事 國の事、世界の事に、經營活動するが、神の敎なり、日本民族の大本領なり。うれしさも、うきにも、月花と共に樂しむが、人の世なりと知れ。特に日と月との光は、常に我を照らし、萬有を照らし、我と萬有とを慰藉し、鼓舞し、安養しつゝある也。花も日も月も、是れ神の光なり。稜威なり。光と稜威との中にある我と萬有とは安全なり。怖れざれ、厭はざれ、そこにこよなき樂を悟り來れ。

天照す神の光を敷島や
日本島根は榮ある國。
敷島の大和櫻をからくにに
うつしながむる世とはなりけり。

神に奏聞

人常に曰く、我は惡事を爲した覺えはないが、なで、神樣は守り下さらぬだらうと。あゝこれ何たる不足ぞや。惡事を爲さぬは、人間として當然なり、それは申譯にはならず、自慢にもならぬ也。汝は何ほど人の爲めに盡し得たる善事ありや。村の爲め、郡縣の爲め、國家世界の爲め、善事を爲し得たるや。先づ以て之を神樣に奏上せよ。

朝夕の愉快

朝は全身晴々して、愉快を覺ゆれども、段々不快になり、仕事するのも苦痛になる。而もその不快を忍び、その苦痛に堪えて、仕事を勉强勵精すれば、その効果も顯はれ、夜分となりては、身に疲勞のなきにあらざるも、何となく、愉快を覺え、元氣も回復するものなり。而し日中に不快と共に、仕事を怠る時は、夜分となりては苦痛を覺ゆるもの也。

後悔

人は後悔の念、起り來る間は、幸也、その後悔の念起る毎に、改めて善に遷るべし。後悔しても、改めて善に移らざる時は、その後悔も漸く惰力を生じ、遂には後悔するの念も消滅し、亦改めて善に遷ることもなきに至る。而して我は次第に墮落の淵に陷りつゝ、人非人化するに至る也。

盜賊教育、聖人教育

兒童は教育次第なり、聖人の子と雖、盜賊の手に投ずれば、盜賊と化す。盜賊の子も、聖人の門に成育せしむれば、聖人化す、日本民族の兒童は

聖人化せしむるを以て、足れりとせず、神の前に教育し、神化せしめざるべからず、否、本來神たる民族也、八百萬神、八千萬神たる民族たることを自覺せしめざるべからざる也。

平和は權威黃金以上に位す

富貴なればとて、平和あるにあらず。
貧賤なればとて、平和は得られざるにあらず。
平和は權威黃金を以て、求め得べからず。
權威黃金より得たる平和は、其權威黃金の滅盡と共に消滅す。
平和は人間より得ざる可からず、人間より得たる平和は永久也。
神は平和の旋風器なり源泉なり、神風に吹かれ、神水に沐浴せよ。平和は直に吹き來り、湧き出る也。

根本と輪廓

常に謹愼自重して、其身に輪廓を造れ、奮勵勤勉して、其事業に輪廓を造れ。輪廓を造るには根幹を要す、誠と愛と義と主義と目的とは、その根幹なり。根幹なくんば、其身にも、事業にも、輪廓なし、輪廓なき身と事業とは、枝葉なき草木にして、其發達は望む可からずと知れ。

道の爲めもゆる思ひのかひなきを
こりずに猶も身をこがすかな。

成功の基

一事を中止する罪は、一兒を墮胎せしむるの罪に同じ、必ずその兒を出産せよ、その一事を成就せよ。是れ事業成功、子孫長久の基なりと自覺せよ。

信神の人

信神の念ある人の眼には、貴賤貧富の別あるなく、賢愚男女の差あることなく、均しく皆、同胞兄弟となり、同身一體となり、亦、獨善獨樂の利己心なきに至る也。

信神の念なき人々は、自己あるのみ、他あるを知らざる也、

祖先と根本

祖先を忘るゝ者は亡ぶ。祖先は宇宙の根本より繼體し來るもの、その祖先を忘るゝは、是れ宇宙根本より離れたる者となる。根底なき身と爲り、國となる也。國としても、家としても、一身としても、祖先を忘るゝ者の亡ぶは當然なり。

實印の人—要辨の人

實印と金庫とをまかせ得る者は、いかにも、愚直律義の人也。然れども、他の要用を辨じ得る才智技倆はなきものとす。他の要用を直に辨じ得る、才智と技倆とのある人は、誠に調法なる人なれども、さればとて、實印

と金庫を委任し置くは、甚だ危險千萬也。一人にして愚直と要辨とを兼ね得る人は、百人中一人のみと、吾父は云はれき。

のらくらの人

維れ人の愚なる、來年は〳〵と云ひつゝも、一旦初春を迎ふれば、去年の苦痛を忘れつゝ、のらり、くらり、と世を送り、亦歳暮ともなれば、來年は、來年はと繰り返すなり。かゝる人々の臍は、横腹にありとこそ聞えし。

冬の夜の星吹く嵐うち羽ふき
大海の上を雁なき渡る。

惡事と金持

今の世は、惡い事をせねば、金は出來ないと云ふ人あり。處が、其人は善事をした人でもない。善い事をすればこそ、大金持ちにもなれ、惡い事をして、大金持ちになつたものは尠ない。こんな事いふ人は、何事もしきらない、意氣地のない人である。

信念思想の標準、壓服刺戟と禍根

國民の信念思想は、常に以て歸宿すべきの標準を與へよ。國民の信念思想にして、その標準を失ふたる時は、國家動亂の時と知れ。標準を與へずして、猥りに國民の信念思想を壓伏せざれ、之れ壓伏する時は、國民

反抗の禍根を培養したる者と思へ。壓伏の際には必ず刺戟者、煽動者、野心者顯はれ來る。國民も亦注意する所なかるべからず。猥りに輕妄擧動する時は、百年の禍根發する者と知れ。

大臣宰相、書生匹夫

東西古今、大臣宰相の過去を尋ぬれば、多くは、一箇の書生匹夫なり。その青匹夫は、いつの間にかは、立身出世して大臣宰相たり。大臣宰相たるの後は、後身の立身出世するを瞰下して曰く、彼れ一箇の措大、一貫の匹夫、亦何をか爲し得んやと。而もその一箇の措大匹夫は、益々立身出世し來りて、自家を凌がんとするに至る。於是、之を嫉妬し、之を排斥せんとす。而も却て自己が排斥せられ沈落するに至る。是れ全く自己の舊位置を忘れ、後身を輕じたる罪に歸す。四時功を爲す者は去る。早く後身の道を開き、身後を安全にするの賢に如かず。

事成りし日にも忘るな成らざりし
その時をりの苦しみをこそ。

人心集中點

信仰は一家人心の集中點、結晶點、統一點也。朝夕の禮拜は、一家同胞一族の集中結合統一を爲すの紀律なりと知れ。信仰なき家庭は、人心常に隔離分散し、その家族は常に外部の誘惑に陷り易き者と思へ。

自警の念

無信仰の人は、自警の念乏し、是れ自警するの動念動機尠きを以て也。信仰ある人は、自警の念、常に起る。是れ朝夕を始め、神を拜し、神を念ふの動念動機につれ、その度毎に自警の念を發し來れば也。自警の念なき者は、其身亡びされば、其子孫亡ぶ。自警の念ある人は、其身興らされば、必ずや、其子孫起る。

用向の家

彼の人は、用ある時にのみ來る。用なき時には、影も見せずと、云ふて尤め立てする事勿れ。さ云ふ自身も、常に用ある人の家にのみ行き、用なき時には、不沙汰勝ちなるに非ずや。

人と草木の道交

草木の生々するを見れば、人の身も、亦、生々する、是れ生々の氣、我にうつり來れば也。人に仁心あれば、その仁心は、草木にうつり行き、草木も亦仁心の德に化す、生々の氣とは直靈の雄走也。伊吹也、仁心とは直靈也、和魂也。神も人も草木も瓦礫も、山も水も、風も雲も、同一直靈也、和魂也。それの伊吹、それの雄走は、相互に感應道交しつゝある也。故に人は常に善、眞、美の伊吹と雄走とを以て、天地萬有を化せざる可からず。

三　主義

どうかなる主義は、薄志弱行、自暴自棄の人。
どうかする主義は、辯才縱横、無我夢中の人。
かくする主義は、確信豫定、遂行の達人。

櫻ほど太き心はなしといへ
色うつりせぬ常夏の花。
はかなしとさのみなけきそ世の中は
ありへはまたも幸のありなむ。

祖先の墳墓

汝の祖先の墳墓を忘れざれ、一度志を立て、鄕關を出るとも、朝夕汝の祖先の墳墓を遙拜し、その成業の後には、必ず墓參して祖靈を慰藉しまつれ、土着の身にしあらば、毎月一日參拜せよ、然らざれば、春夏秋冬の四季に參拜せよ。少くとも春秋二季には、參拜して、家事一年の成績を奏告し、死に仕ゆること、なほ生に事ゆるが如くせよ。祖先の喜びは云ふべくも非ず、その身の繁榮、子孫の興隆疑なし。

世の人に知らせてしかな光あり
榮ありける神の禊を。
歸りても禊なりけりいつもかも
太神大神稜威赫灼尊哉。

貧しきに亂れず富に淫まずに。
　　吝み奢らぬ大丈夫の友。
かにかくに行き得るきはみ進み行け
　　これやそれやと胸しいためで。
思ふ事成る日もいつかありなまし
　　ありへは友もつとひ來りて。
朝夕に歌あり詩あり文もあり
　　我は富みけり黄金なくとも。
八百萬神もあはれと守るらむ
　　道の爲にぞやつれ行く身を。

大禍津毘

我が妻は醜なりとて、之を憎み、藝娼妓は、美なりとて之を愛す。然らば何故に、彼女を妻としたる歟。已に十年餘の契を重ね、息男息女を設けたる彼の女は老いたり、之を厭ひ之を憎むと云ふ汝は、是れ却て夜叉王也、大禍津毘也。神罰思ひ知れ、必ず汝の身に迫る。

愉快

人知らず、世にも知られぬ間に、獨り我が胸中に無限の愉快を覺ゆる人にして、初めて神に見ゆるを得るなり。

神の感念

寸時も神と云ふ感念を失はざれば、我れも神となり、神も我れに宿り來り、我れが神歟、神が我れ歟、我れ神に化し、神我れに化し、人としての神、神としての我れたるに至る也。

苦樂、雄詰

いかに苦境にありとも、雄健雄詰を怠るな必らず苦境を脱して樂境に入る。いかに樂境にありとも、雄健雄詰を怠るな。樂境益々進みて、大樂境に入る。

濁江の水にも月はうつりけり
　汚れある身も神の宿れる。
濁りゆく世をも厭はで照らすかな
　空澄み渡る秋の夜の月
世の爲めに誡つくせと諭されし
　御聲は今に耳にありけり。
よな〳〵に父の御魂と交はりて
　神の御教語るうれしさ。」

無資本の者　頓馬の自白

人々輙もすれば曰く、我に五百か千圓かの資本あれば大利得の事業あれども、資本なきが故に、常に失意悲慘の境に在りと。此の如き人には、資本を與ふるも直に失敗する人也。資本なきが爲に、成業すること能はぬ人は、資本を與へるとも又復失敗す。古來成業の人々は、初より資本を有し居りたる者にあらず。眞個、英雄の士は、いかに無資本なりとも自己の識見抱負を以て、必ずそれ相當の資本を得るに至る。事業は資本にて起らず、自己の手腕によりて成る。自己に識見抱負手腕あれば、事業は自から發見さるゝと共に、資本は直ちに舞ひ來る。資本なきを嘆ずるは、自己の頓馬なることを自白する痴漢と知れ。

世の壓迫が甚だしいとて、世を怨み、人の迫害が太だしいとて、人を尤むるは、薄志弱行の徒也。英雄の士は、世の壓迫も、人の迫害も何かあらむ。次第に之を淘汰し去り、到頭、自己の頭角を顯はし、自己の本領を發揮し、世を化し、人を化し、其處に我世を造り出すものぞ。

老人と壯年

少年は老人を慕ひ、老人は壯年を慕ふ。慕はるゝ老人は、好んで少年を愛すれども、壯年は老人を厭ふて厄介視す。自己の糞小便は曾て老人の世話になりながら、老人の糞小便を見ては世話せざるのみか、却つてその不潔を痛罵す。咄、この痴漢、必ずや終りを能くせず。老人を愛する少年にして、初めて、その身に光と榮との發し來るなり。

道樂と子孫

碁、將棋、玉突等は、趣味あるべきも、吾人一人の趣味にして衆に及ばず。死後亦子孫を潤益すべき餘澤なし。均しく道樂なれども、廣く衆に及ぶもの、永く子孫を益すべきものに向つて、道樂せよ。

人格と主義

主義節操なき者には、人格なし、人格ある者は主義節操あり。人格は主義節操の表現なり。主義節操は人格の色彩光澤なり。

我が一身

我身には、幾百萬の祖先の魂宿ると共に、亦幾百千萬の子孫の魂が宿り居る、金玉の身なり、自重自愛すべし。

直靈及諸魂

直靈窒息失統一。諸魂分裂罹禍毘、諸惡尤罪隨處發。我今悔之入禊祓。乃祓乃禊直靈開。諸魂統一撥禍毘。禊祓如風雨。吹清身塵埃。直靈如日月。千魔萬怪滅。

祖先と祖國

祖先を思へ。祖先を思ひ、祖先を慕ふ子孫は、必ず興隆す。祖先を忽にし、祖先を忘るゝ子孫は必ず衰滅す。祖國を思へ、祖神を思へ。祖國を思ひ、祖神を偲のぶ民族は必ず興隆す。祖國を輕んじ、祖神を忘るゝの民族は必ず滅亡す。

職業

一先づその職に安んじ、其事を務めよ。而して我よりその職を大ならしめ、我より其事に光を發せしめよ。然らざれば、如何なる職にも破れ、如何なる事をも爲し得ざる者と知れ。

强弱言語

强きものは言葉少く、弱きものは言葉多し。弱きものは遠吠し、强き者は肉薄す。

八百萬神、到處山川

八百萬神は、形をかへ、姿を替へ、到る處にましますなり。一唾の唾なりとも、むやみにはくべきものならず。ましてや、大小便等を河谷溝乃至田畑なりとも、むやみになすべきものならず。之をなすには、相當の場所を選み、その旨をその場所に物語りつゝなすの心得あるべきものぞ。我が大小便の爲に五穀を傷つけ、或ひは水を腐敗せしむるの原因たらずとせず、神々を瀆しまつるの恐あり。八百萬神を尊重するものは、よく〳〵其邊の心あるべきものと我母はかたられき。

荒魂の清濁

人間は常に荒魂なる肉體を沐浴して淨めよ。肉體なる荒魂清ければ、精神なる和魂の清きは云ふまでもなし。和魂の濁りて混濁するは、常に肉體なる荒魂の汚れより起るものぞ。直靈は云ふまでもなく、和魂は本來清淨無垢なるものぞ。荒魂なる肉體の汚れざる限りは、その光を蔽はるるものにあらず、肉體を清めよ、荒魂を清めよ。更に室内室外を清めて怠らざれ。

事業と我身の勤惰

事業や、仕事は、前後左右より、集り來りつゝあるものなれば、之を受け之を行ふに於て、寸暇なきものぞ。安閑呆然怠り勝ちなる時は、その事業も、その仕事も、漸々次第と我を見捨てゝ、去り行くなり。如何に

職を失ひ業なき人と雖も、自ら時間を空ふせず、その當時我身の爲し得るだけのものを、よしんば、室内室外の洒掃なりともなしつゝある時は神はその勤勉の行爲を賞し、必ず、事業を與へ來る。仕事も亦其人の手を離るゝものにあらずと知れ。

世を思ふ心は水にあらねども
流れ行かざる里のなかりき。

信仰の比較、糞中の虫

信仰は人間萬有の出發點にして歸着點なり。均しく信仰せば、高き廣き深き信仰に昇れ。いづれが高きいづれが低きを知らんとせば、彼と此との比較あれ。比較の道に出でざる者は、彼のみ知りて此を知らず、此のみ知りて彼を知らず。遂に邪道に陷りつゝあるも辨ぜざるに至る。糞中の虫は、其臭を辨せざるの愚に歸するものぞ。

一心同體、同根一體

戀も同心一體にして全く、愛も慈も同心一體にして全く、孝も一心同體にして全く、忠も一心同體にして全く、信も一心同體にして全く、友も悌も義も操も、すべて一心同體にして全きものとなる。人類萬有、本來同根一體なるを知れ、知ると共に、獨り人倫のみかは、一事一物、悉く同根一體たるを忘れざれ。

不孝の罪、父母に在り

父母克く其子を愛すれば、子も亦父母を慕ふ。父母にして子を忽にすれば、子も亦父母を輕んず。孝子を有するの父母は、克く其子を愛育訓練したれば也。不孝の子を有するの父母は、その愛育を忽にし、その訓練を怠るに因る。不孝の子は、にくむよりも、寧ろ憐むべし。罪父母に在り、父母その愛育を怠り、不孝の子たらしめたるに過ぎず。

好運の曉鐘

我は惡事を爲した覺えなし、何故にかくも不運不仕合のみ打續くかと怨む人あり。是れ消極なり、是れ其愚を自白するに過ぎず。惡事をせぬのは、人間として當然なり。惡事をせぬと云ふ事は、申譯とするに足らず、寧ろ進んで、我は幾許の善事を世に爲したるかを思へ、是れ積極也、是れ好運と仕合とを招くの曉鼓也、曉鐘也。

二・つなき命は獨り國の爲めに
捨つべきものぞ大丈夫の友

千古の破魔鏡

古今の書に囚はれざれ、新聞雜誌に囚はれざれ、與論と云ふ聲に囚はれざれ、古今の書も、新聞雜誌も與論も、參考として之を讀み之を聞け。古今の書以外、新聞雜誌以外、與論以外に、超然卓出し、最も高處に在りて、最も至正至公の立論と建業とを以て、天下社會を誘導啓發し、當代の燈明臺たると共に、千古萬古の破魔鏡たれ。

小人—大人—至人

小人は身を思ひ、中人は家を思ひ、大人は國を思ひ、哲人は世界を思ふ。至人は宇宙萬有を思ふて已まず。

人の長短

人は長短あり、その短を捨て、其長を採れ。長を見て短を見ざれ。寧ろ其長を用ゐつゝ、その短をいつとはなしに改善せしめよ。初めは長のみを讃美し、其人を滿足せしめ、次第に交りを重ねつゝ、相互に親しむに至りて、その短を諫めもし、正しもせよ。

勉學

少しく暇を得ば餘裕のあるに至らば勉學せん、と云はざれ、此の如き心得にては、終生暇なし、餘裕も得べからず。勉學せんと思はゞ、繁劇の中にも、貧苦の中にも、切めて夜分の一時間を設けて、勉學せよ。必らずや數年の內、その學ぶ處の道に上達するに至るものぞ。

神ながら

生を知るが如く、死を知れ。冥々の中に神ながらを信ぜよ。現世生活のみなりと思はゞ誤なるぞ。原因結果の輪廻を知れ。自己の行爲の善惡は、必ず子孫に及ぶ事を忘れざれ。舅姑に孝なれ。嫁に愛あれ。兄弟姉妹に

仲好かれ。

愚痴空想

老人は多く昔を繰り返して已まず、青年は之を排斥して愚痴と云ふ。青年は多く未來を物語りて已まず、老人は之を排斥して空想と云ふ。老年は過去を知りて未來を知らず、青年は未來を知りて過去を知らず。過去未來の調和ありて、初めて現在實行の門開く。

空想と實顯

徒らに空想の雲に馳せざれ、刻々現在の花園に近づきつゝ實行せよ。更に其實行を理想化して、その理想を再び實行せよ。然れば、是れ空想に非ず、理想に非ず、空想を漉過したる理想實現の實行也。

巣窟

一身一家を思ふは不可ならず、而も禽獸も克く其身を思ひ、其巣窟を思ふを知れ。人は禽獸に非ず、更に國家社會を念はざるべからずと知れ。

我意を枉げよ

自ら爲す事すら、自ら氣に入らぬ事多し、我身ながら、我身の儘ならぬ事少しとせず。況してや人の身にして、人の爲す事にして、我身に儘ならず、我身に氣に入らぬ事多きは當然なり。左れば害なき限りは、小言を云はず、我意を枉げて其人の爲すに委せ、其人の事に終あらしめよ。

それよ、害なき限りは其人の行動に干渉せざれ。其人よく我意を解せば又それ、我身の如くに苦勞するを厭はざるに至るべきか。是れ所謂知己の感として、相互に、次第々々と、赤誠を其胸中に推しつゝ進み、其極には、却つて、同心一體ともなるべきものぞ。

土石瓦礫

土石瓦礫を、無覆無記とは、誰か言ふぞ。平安朝も、奈良朝も、神代の昔も、物語りつゝあるは、彼の土石瓦礫なり。夏殷周三代も、三皇五帝も、物語りつゝあるは、彼の土石瓦礫なり。羅馬王朝も、希臘の盛時も、埃及の昔も、物語りつゝあるは、彼等土石瓦礫なるを知らずや。

平素の覺悟

何人も天下國家の難には、何時にても、身を投じて犧牲たるの覺悟あれ。平生父母妻子と共に、其覺悟を定めつゝあれ。スハ鎌倉といふ時に、自己の狼狽せざるのみならず。父母妻子に、危惧の念あらしめざれ。

神の聲

山水の背景、花鳥の歌舞、是れ自然の音曲、自然の劇なり。自然の音、自然の劇を樂しみ得るに至りて、始めて、神の聲を聞き得るに近づきたるものなり。

神の前

人は僞り得べきも、神を欺くを得ず。汝が胸中の物語りは、人の耳に達せずして、秘め置くことを得べきも、神の耳には、言々語々、直に達す、秘め置くを許さず。

善惡は我に在り

信仰なき人は、曾て我身を責むるを知らず。何事につれ、他を怨み、他を罵り、他を怒り、自己には瑕瑾なき者と思ひ居る也。信仰ある者は、何事につれ、我身を責むるのみ、他を責むることを思はず。そは他の惡きにあらず、我身の惡き也。我れ善なれば人も善、我れ惡なれば人亦惡

となる。善惡は我に在りて人に在らず。他を怨み、怒り、罵る事あれば我身の足らず、我誠足らず、我德足らず、未だ人を化する能はざるを知れば也。

人格と學說

自己の人格を重んぜざる人の言行は、採るに足らず。國家民人は容赦なく、その人々を排擊し、その學說を驅逐せよ。

死の用意

生の用意と共に死の用意を爲せ、人間はいつ何時死するかわからぬものぞ。平生常に、いつ死しても遺憾なきまでの用意を爲しつゝあれ。然れ

ば、人は常に忙しくて暇なきに至ると共に、更に忙中の閑を得るものぞ。

睾丸と活殺

自ら弱點を有する者は弱し、常に他人にその弱點を抑へられ、云はんとすることも云ふ能はず。行はんとすることも行ふ能はず、如何なる英雄も碩學も弱點を有する者は、癇癪ある身にして、天下の公處に立てば其位に堪へず。自ら顚倒せざれば、他に打擊せられて斃る。自己の弱點を他人に抑へらるゝは、睾丸を他人に握られ居るに均しく、活殺の權、他人に在り、危い哉。他人の弱點に乘じ、他人の睾丸を握り、他人を利用し、我事を爲さんとするも、危し、他人の睾丸を握り殺す時は、自分の生命も斷絶する時にして、其心術の陰險陋劣は、握り睾丸にも優るなり。

本末

本を忘れざれ、朝夕必ず、祖先の靈を祭れ。末を忽にせざれ、子孫を愛して訓練せよ。

日曜

日々夜々、その業務を營みて怠らず、一週間毎に。一日の日曜に會ひ、その日曜を父母妻子朋友と送らば、人生の快事、亦何物か之れに如かめや。

得意

得意の境には、常に失意の時を忘れざれ。朝夕必ず之を回顧し、自ら警め子孫を戒め、汝の祖業を興し、汝の子孫に光榮あれ。

恥辱

恥を知れ、辱を知れ。未だ何事も爲し得ざるの恥を知れ。鄕黨朋友に對して面目なきの恥を知れ。

望

神は汝の望む所の總てのものを與へつゝ、汝の自ら進みて、取るにまかせつゝありと知れ。

强き樂み

其日其夜を樂しく送れ。貧の中にも、病の中にも、失意の中にも樂しく送れ。貧の上に苦しみ。病の上に苦しみ、失意の上に苦しみて堪へ得るものぞ。樂みを以て貧を慰め、病を慰め、失意を慰めよ。貧と病と失意との樂みは、弱くして折れ易し、神の樂みを以て、之を强くせよ。

清き樂み

其日其夜を樂しく送れ。富の中、得意の中、健全の中には、より以上の樂みあれ、樂みに淫せざれ、樂みに溺れざれ、富貴の樂み、得意健全の樂みは腐敗し易し、神の樂みを以て、之を清めよ。

祖國的信仰

我先づ進み、世界と共に進め、世界を率ひて進め。內を知り、外を知り、內を主に、外を化し、內外一家として進め、世界進歩の主動者たれ、標準點たれ。支那印度土耳古の如く、內にのみ眠りて、外に制せらるゝこと勿れ。西、葡、蘭、英、獨、佛、伊、露の如く、外にのみ走りて、內の精神的歴史を塗抹し、他日の悔を招かざれ。

善惡唱神

惡しき念發せば、是れ禍津毘の誘惑なり。直に唱へよ、大祓戸大神、一唱直に祓ひ去る也。

善き想起らば、是れ神直靈神の御導きなり。直に稱へよ、天御中主太神一稱直に大稜威の中に灼く也。

竹馬の友

遠國にて故鄕の人に邂逅し、或は十年廿年後に於て、竹馬の友に再會す、何たる快事ぞ。相互に警め、相互に親み、相互に扶助する所あれ、利害の念を以て其義を破らざれ。

小人の位

一時の勢に乘じ、人後に附して、巧に後を得、職を得たる小人と雖、驕

然、心を清め、貌を正し、神を信じ、徳を積みつゝある時は、庶幾ば、其位を保ち、其職を全ふするを得む。

大人の位

自己の智略學問功績等に依り、位を得、職を得たるの大人と雖、心に敬なく、貌に禮讓を缺き、神を信ぜず、徳を積むことなき時は、必ず人の尤めあり、天の罰あり、況してや、小人の徒にして、信神の念なく積徳の行爲なき時は、急轉直下、最も悲慘の窮地に墮落するものぞ。神人監視、永くその横暴を許さゞれは也。

目的

世に愍むべきは自暴自棄の徒なり。いかなる善言も諫言も、耳を傾くる能はず、「まゝよ。馬鹿なれば馬鹿でよい墮落すれば墮落せり、家名がなんだ、祖先がなんだ、善も惡もあるものか。社會がなんだ、國家がなんだ、忠も孝もあるものか。我は吾好む處を爲せば足る、乞食でも、野倒れ死にても可なり。我前には秩序も禮讓も認めぬなり」と。あはれ自ら進んで墮落し、自ら進んで馬鹿となり、祖先を辱しめ、家名を傷け、善も惡も辨ずること能はず、社會を害し、國家を賊し、社會に制せられ、國家に罰せられ、遂には、その好む所も爲す能はず、赤衣の身となり、幾年苦役の後、再び世間に出るも、朋友知人よりは敬して遠ざけられ、見事目的通りの乞食となり、野倒れ死にするに至るのである。自暴自棄の人々は、早く善言に耳を傾くる所あれ。

善惡と進退

惡事と思ふ事は、退いて直に之を廢す。善事と思ふ事は、進んで直に之を爲す。一事斯の如く、積で萬事に達す。終に克く英雄たり、豪傑たり賢たり、聖たり得るに至る。

大善事大惡事

只その一小善事、進んで直に爲す能はずんば、共人遂に一生克く善事を爲すこと能はず、次第に惡事を爲すの餘儀なき位置に陷る。唯その一小惡事、直に退て之を廢せずんば、遂に大惡事を爲すの餘儀なきに達する者と知れ。

善印跡と善化

自己の行く處、屬する處、留る處、住む處に於て、よしや、一時間なりとも、一晝夜なりとも、一月一年なりとも、必ず善き印跡を遺し、善良なる感化を人々に與へ置け。善き印跡は、永く自己を代表し、善良なる感化は、久しく人々に敬畏愛慕せらるゝ者と知れ。

惡印跡と惡化

自己の到處に於て、惡印跡を遺し、惡感化を與へある者は、長く人々に不快の念を感ぜしめ、自己それ自身も遂に不快の念に堪へず、老後を待たず、苦悶苦死するに至るものぞ。

影言

影言を云はされ、汝は大丈夫なり、婦女子に非ず。何を恐れて影言を云ふや、影言を云ふの人は、卑怯なり、男子たるの資格なし。終生大丈夫たるの行動なきに至るぞよ、

天下社會の念

天下社會に事業を建てんとする者は、天下社會を念として起て。天下社會を念とする者は、必ずや、天下社會の事業を建設するに至る。自己を念とし、一家を念として起る者は、斷じて天下社會の事業を建設し得る者にあらず、その念、一身一家に存するも、天下社會に存せざれば也。

不滿不平の人

その主に不滿あり、その位置に不平あらば、直にその位置を去り、その主と別れよ。

天下は廣し、その人は尠からず、汝の喜ぶ處の主に賴り、汝の安んずる處の位置に立て。

その主と別るゝ能はずして不滿を抱き、その位置を去る能はずして、不平を抱くは、其主に對しては不誠實となり、その位置に對しては不熱心となり、是れ獨り他を賊するのみならず。自らをも賊するものぞ。

主人も位置も其人を厭ふ

不滿を抱く者は、自然顏色に顯はれ、その主も之を喜ばず。不平を抱く者は、自然仕事の上に顯はれ、その位置も亦その人を厭ふ。その人去らされば、其主は之を去らしめ、その位置も亦その人を彈撥す、常に不滿不平を抱く者は到處に不滿不平あり、何人も其顏色を見、其言語動作を視て之を厭ふ、終生良主人に會ひ、良位置を得べからずと知れ。

信仰なき人

信仰なき人よ、汝は曾て我身を責むる事を知らず。何事につれ、他を責め、他を怨み他を怒り、他を罵り、自己には瑕瑾なきものと思ひ居るなり。已に信仰なき汝は、神あるを知らず、神あるを知らざるが故に、畏敬の念起らず、畏敬の念起らぬが故に、退て自已を反省すること能はず。

自己を反省せざるが故に、自己を責めず、自已を責めざるが故に、他を責め他を怨む。他を責め他を怨むが故に、他に厭はれ、他に擯斥され、一生浮ぶ瀨なきに至ると知れ。是れ信仰なきが故に、神に近づくこと能はず、我より神に捨てられたる身となる。神に捨てられたる時は、人に棄てられ世に棄てられたる時なりと知れ。

刻々奈落に沈む

自ら勞せずして、効を收めんとすること勿れ。汝は常に勞せずして効を收めんとす、是れ終生その効を收め得ざる所以なり。遊惰は底なき船にして、刻々奈落に沈み行きつゝあるものと思へ。

教へざるの罪

祖國の淵源は、その子孫としては、何人も知らざるべからざるも、而も、何人も克く之を知るものなし。是れ彼等の罪にあらず教へざるの罪なり。罪學者に在り。

愛國心なき學者

神道を知らざるは、祖國を忽にするものなり、祖國を忽にする時は、祖國を忘れんとするに至る。學者先づ神道を知らずして、之を輕んず。是れ彼等に熱烈なる愛國心の發起せざる所以也。

國家の娯樂

國家無事の際には、娯樂も亦一興なり。然れども、それ唯だ、娯樂なり。故に、心身を害せず、國家を害せざる程度に於て、求めざるべからず。心身を慰藉し、國家を利する上に於て求むる所あるべし。されば餘りに藝人を優遇し。俳優を優遇して、その度を過ぐる時は、却つて娯樂道にのみ溺惑し、心身を害し、國家の元氣を害するぞよ、思はざるべけんや。

我子の不孝

我子の不孝を嘆ずるの父母は、多くはその子に不慈の親たることを自白するものとす。母慈に、父嚴にして、其子を育せば、その子は必ず孝子

なり。

我親の無慈悲

我親の無慈悲を叫ぶの子あらば、是れその親に不孝の子たることを自白するものたり。其子孝順にして、その親に仕へまつれば、斷じて無慈悲の親あるべきものならず。

化神の姑と嫁

姑に慰安を與へ、快感を起さしむるの嫁は、神の化身なり。嫁に喜びを與へ、微笑を催さしむるの姑も、神の化身たり。家々到處にこの化身の神々を見たくもがな。

雪月風花

春暖の後に夏熱あり、夏熱の後に秋冷あり、秋冷の後に冬寒あり、冬寒の後に春暖あり。主神の配合、何ぞそれ巧妙なる。春は花、夏に風、秋の月、冬は雪、主神の意匠、何ぞそれ壯嚴美麗なる。

物質と生命

物質的一元論者として、當代の泰斗とも呼ばるる、獨逸のヘツケル氏さへ、物質の本源には、一種の精神的生命の力ありと認むるに至つた。是れ當然なり。日本神代垂示としては、幾千年の昔よりして、物質に精神的生命あり、否、精神的生命あるにあらず、物質が即精神である、物質

の稀薄なるものが精神で、生命で、精神生命の濃厚なるものが物のである。是れ實に世界列國東西古今に超越したる卓見で、吾人質委に大聲疾呼する所である。

基督教も偶像教也

基督教徒の墓下には、その死者の靈魂ありや、なきや。彼等と雖、千萬年の後に神の判決のきまるまでは、死者の靈魂は、その墓下に眠りて、永眠しつゝあることを信じつゝあり。然れば、偶像なるその墓石に靈魂あることを信じつゝあるが故に、基督教も亦偶像教である。汝の墓下に汝の靈魂あるが如く、基督教徒以外の人々にても、すべての人類の墓下には、悉く一種の靈魂ありて、一定期間は宿りつゝありと知れ。大偶像

なる高き蒼天の上に神あり　小偶像なる墓下に靈魂あるが如く、神社にも御幣にも神明の鎭座しあることを知れ。

元氣集注と事業

何事でも、一意專心たれば、全身の氣が、その一事に集注するから、その集注した氣がその一事に結晶する故、その結晶した息氣の輪郭が、集注毎に、結晶毎に、厚く廣く、强く大きくなるものぞ。一日專心一意たれば、全身の氣が、一日丈け、それだけ、其事業に集注結晶するを以て、一日丈けの輪廓が、厚く廣く强く大きくなるので、一日より一月、一月より、一年十年と、專心一意にして怠ることとなければ、その集注と結晶との量が、それ丈けに積み重なるから、その輪郭が亦それ丈け、漸々と、

厚く強く大きくなりつゝ、遂に以て、其事業が、身に顯れ、家に顯はれ、國に顯はれ、世にも顯はるまでに行くものと知れ。

息氣の傳達と息氣の分裂

全身の息氣は、手に傳へ、筆に傳ひ紙に傳ひ、文字となり、文章となるが如く。口に傳ひ、言語に傳ひ、第三者に傳ひ、交渉談判となり、事業となるが如く、總ての機關より傳達して、その目的に向ひ集注するものと知れ。故に、その目的が二個あれば、我が全身の氣は、二分されて、二個の目的に分注し、三個の目的あれば、三分して三個の目的に分注するので、ましてや、四個五個の目的あれば、全身の氣は、個々に分裂して行くのである。全身の氣が、二分三分、若くは、四分五裂しては、その集注の氣が薄きと共に、集注力も弱いから、結晶する量も少くしてその目的、その事業の輪廓は、廣く大きくなることが出來ない。よしや、廣く大きくなるとも、その內容の威力が厚く強くなる事が出來ない。輪廓が稀薄にして、內容的威力が弱いとすれは、彈撥力が乏しいから、人の注意を惹き起すこと能はず、世に模範とせらるゝ事業たることは出來ない、人に誇るべき事業とはなり得ざるものぞ。神の御教として「息氣の分裂事を忌む」と云ふことは、正數、此にあり。古人が一意專心とは息氣の集注することを意味したもので、只、その內容を明細に云ひ表はすことが、出來なかつたまでと知れ。

息氣とは、客觀的名稱で、息氣其的が主觀すれば、靈也、魂也、靈魂也文章も、事業も、主觀的靈魂の分泌分出して、集中結晶しつゝ、客觀的靈魂となり、客觀的事業とはなりつるものと知れ。客觀的靈魂、客觀的事業の後世に存し、後世に傳はれば、即、主觀的靈魂、主觀的人格として、後世に仰がれ、後世に顯はるゝに至るものぞ。是れ主觀的靈魂が內より出でて、外に留り、客觀的靈魂となり、事業となるまでなるぞかし。されば、主觀的靈魂を移して、客觀的に留め、客觀的靈魂となりて、永く國家世界に留ることを忘れざれ。

大義名分の實行

近來絕て、口に大義名分を唱へ、身に大義名分を行ふ者あるを聞かず。是れ豈に、國家社會の深憂に非ずや。吾徒同人、深く大義名分を辯じ、強く大義名分を實行することを期せよ。國家の憂は、大義名分を辯ぜざるに發し、社會の危きは、大義名分を實行せざるに起ると知れ。

節操

一定の主義に殉じ、一定の主義を一貫して、變ずることなき、之を稱して節操と云ふ。主義に殉ずるとは＝主義の爲に、犧牲となり、一身の利害禍福を顧みず、いかなる困難に投ずるも屈せず、いかなる危險に遭遇するも、恐るゝ事なく、主義の爲に生き、主義の爲に死し、唯だ主義あるを知るのみの主義の遂行を期するの言論行爲を意味す、主義の一貫とは、人生百般の出來事に向ひ、その主義を以て裁斷するのみならず、一